
CROSS...

イイポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSS...

【ΖΖコード】

Ζ5175F

【作者名】

イイポン

【あらすじ】

ダラダラとした高校生活を送る主人公『山岡高貴』。彼が毎日の様に通う神社『如月神社』。この日もいつも通り学校帰りに神社に寄つた彼はとんでもない体験をしてしまつ。

『あれは……夢だったのだろうか……きっと夢だったんだろうな……夢じやなかつたらあいつら今頃どうしてるんだろうな……』と一昔前の出来事を思い返していた。

教室の端の席。窓際の後ろから3番目であつて前からも3番目。列5人のちょうど真ん中の席。そこが俺の席だ。

俺は地元の私立高校に通う3年、山岡高貴。ヤマオカコウキ俺は暇な授業の時は、横の窓から見える山にある、如月神社を見つめ考え事をしている事が多かった。

今授業は世界史、俺に限らずクラスの半数の生徒がこの授業を嫌つていて。半数のうちの9割は男子生徒だ。

世界史が嫌いな訳ではない。嫌いなのはティーチャーの方だ。この世界史を担当している清水と言つ先生は、兎に角うざいのだ。

まず、女性好き。必然的に女性に甘い。

俺だって女が嫌いなのかな??と聞かれたら答えはNOだ。勿論、俺だって健康的な男、当然、野郎より女の方が好きに決まってる。

それにも、清水の場合は度が過ぎていいのだ。決して猥褻な行動をとるわけではない。

ま…女子生徒からしたら優しい王子様タイプなのだ。俺達、男子にも優しいのであればクラス中の人気者となつただろうに…って俺は

何をぐだらない事を考えているのだ…

と頭を搔き（カキ）龜り（ムシリ）、頬杖を着いて目を閉じた。

俺はあの出来事依頼、再びあの世界に行けるのでは無いかと目を閉じる時はいつも胸を躍らせ、少々ワクワクとした気分になる。

でも…あれから一度1年…やつぱり、一度と行く事はできないのだらうか…

2007年11月29日。

俺は遅刻が多いとの事で、生徒指導室に呼ばれた。

内容など一々先生方に大切な時間を割いて言われなくとも分かっていた。

『山岡…お前ももう直ぐ3年生だ。このまま遅刻が続いたら大学の進学にも響いてくるぞ。2年生の間に悪い癖は直しておいた方が良い。』

『おせこんな内容の事だらう…と俺は大きくアクビし、『ねむツ』と呟いた。

生徒指導の田辺に言われた事は、俺の予想とほぼ同じだった。強いて違いを言つとすると、俺の予想に『色々と悩んでいるなら相談に乗るからなーー』と付け加えたと言つ感じだ。

おまけに今度遅刻したら、親子面談だそ�だ…全くもつてうつとう

し…

『はあ… もあ 6時じやん… 大体、俺に遅刻するなと言つなら一刻も早く帰らせりつてんだ!!!!』と俺の行く手を阻むかの様に立ち尽くす身長15センチくらいの空き缶を蹴り上げて自転車置き場へと足をすすめた。

自転車にまたがり、俺はいつもの神社へと向かつた。

高校生になつてからは殆ど毎日の様に通つてゐる神社だ。理由はと言つと…特に無い!!!!

めんじくさがりやの俺が雨の日も雪の日も学校が休みの日でさえもこの神社に来るのだから、この神社には凄い力があるのだろう。

いつもの様に神社の隅に自転車を止め、【如月神社】と綺麗に彫られた鳥居をくぐつて境内へと一直線に進んだ。

『おお高貴!! 今日も来たのか。今日はいつもより遅かつたからもお来ないのかと思つたよ。』と俺に話しかけてきたのはココの神社の主?? 英明さんだ。ヒテアキではなくエイメイと読むらしい。

英明さんはああ見てもまだ20歳で俺の兄貴的存在だ。

『ちやつす。今日は、生徒指導の爺に呼ばれてさ… 2時間近く説教よ… 勘弁して欲しいは…』といつもの様に英明さんには最初に挨拶 + 愚痴を言つのがお決まりだった。

英明さんは『ハハハハ』と笑い、持つていたホウチ箒を近くの柱に立て掛け、掃除を終了した。

どおやら俺が来るまでは落ち葉をかき集めて居たらしい。

11月中旬頃は紅葉が綺麗だったこの神社も、ソロソロ枯れてきたか…と思い、落ちているモミジ一枚拾い、風に乗せて宙を舞わせた。

俺はニヤツつと笑い、咲き誇る紅葉も捨てがたいが、最後の締めとして真っ赤な枯葉が風さらわれ一斉に空に飛び立つのも又、見事。と腕を組んでウムウムと一人で頷いていた。

真っ暗な神社を木達と並ぶほど高い電灯が紅葉をライトアップし、枯れて舞う葉はライトの光の中を抜けると一瞬にして見えなくなる…これまた見事。と俺は電灯をポンポンと叩いて、英明さんが呼ぶ小屋へと足を進めた。

小屋では英明さんが体の心まで暖まるお茶を入れてくれていた。

『なあ英明さん。こんな小屋に住んで不便じゃねえのか？？？』と俺はいつものように思つていながら聞けない…と言つ事をとうとう聞いてしまつた。

『小屋…ねえ。まあ慣れれば問題ないんだけどさ。』と英明さんは小屋で一番テカイ柱を撫でて笑つた。

『ふうん。まあ英明さんが満足なら良いんだけどさ。』と実は俺も、この小屋が結構お気に入りだった。

8畳くらいの小さなスペースに色々と生活必需品があいてあるものだから、空きスペースは3畳くらいだ。小屋で話したりする時はい

つも敷きつぱなしの布団の上に座つて話していた。

『そんな事より、お前に見せたいもんがあるんだ。』と俺に懐中電灯を投げ渡し、一人小屋を出て人差し指をクイクイクイツと俺を呼んだ。

見せたいもんつて何だろ？？？と思いつつ、俺は残り少ないお茶を飲み干し、受け取つた懐中電灯を手に外に出た。靴の踵を踏んだまま英明さんの後を追いかけた。

『ううう。さみい。何處いくん？？？』組んだ腕を腹にギュッと引き寄せ寒さを凌いだ。踏んでいた靴の踵を戻してソントンとしつかりと履いた。

『裏だ裏。』と英明さんはニヤニヤと笑いながら言つた。

裏に回るのなんて久しぶりだな…と思いつつ、英明さんについていった。

今日は、満月か…星も結構でているな。と空を見ながら歩いていたせいで「ブヘッ」っと前を歩いていた英明さんが立ち止まつたのに気づかず、背中にぶつかつてしまつた。

『ほれ！…見てみい！…』と英明さんはなにやらボタンを押すと『カチッ』っと言ひ音をあげ、境内の裏にはが薄暗い明かりで包まれた。

『おおおおーー。』と俺はついつい声を出しちしまつた。裏には一面に芝生が植えられており、見違えていた。

良い感じだろ！？』と言つ英明さんに、うんうんうんと何度も頷き、何故か俺は靴を脱いで芝生の上に上がつた。

『ハハハハハ！何でお前は靴をぬぐんじゃ。』と英明さんにも突つ込まれ、俺は少し頬を赤めた。でも、大きいベットに乗るような感じだつたから…と告げると、再び笑つて英明さんも靴を脱いで上がつてきた。

俺は満天の星空を見上げ、大の字になつて寝転がり『すげえ』つと連呼した。同時に英明さんも同じような事を何度も連呼していた。

俺は眩暈^{メタメタ}がしそうな星の数に感動していた。夢のような空にいつの間にか本当に眠つていることにも俺は気がつかなかつた…

『君！君！君！大丈夫か！？！？』

『こいつ変な格好してるし…関わらない方がいいんじやないですか？？？』

『そんな事言つても、氣を失つてるみたいだし、こんな所で放置しておくるのも…』

『ん…』人声が聞こえ俺は要約眠りから覚めた。眠つてしまつたのか…と思つたのは一瞬で、朝だと氣がつくと心底驚いた。

『おお…氣がついたぞ！お前大丈夫か！？！？』

『え！？』と俺を覗き込むように見ていた一人の男は英明さんではなく見たことも無い格好をした30歳くらいのおっさんが立つていた。

その横に珍獣でも見るかのような目で腕を組んでこいつを見てるオッサンも居た。

こんな所で何をしているんだ！？！？といきなり質問された。

『え！？あの…英明さんは…？？』と頭を搔きながら俺は質問を質問で返した。

『エイメイ？？？…誰だいそれは？？？』とさつきから俺を気にかけているおっさんが不思議そうに再び俺の質問に質問で返してきた。俺の答えを待たずに、もう一人のおっさんが『誰だか知らないがエイメイ何ていう人はココには居ない。』と言われた。

聞くとこの変な格好をした一人は警察らしい。どお見ても警察とは思えない格好で本当に警察なんですか？？と聞くと警察手帳の様なものを胸ポケットから取り出し、テルミナ警察所の隆一・岡野と書かれた身分証明のような物を見せてくれた。

見せてもらった直後の感想は『何だこれ？？？』ついカレタおっさんか？？？』と言うのが俺の正直な感想だった。

今日の朝方この近くに住んでいる住人により『変な人が倒れている』との通報がこのおっさん達の警察署に入り、一人が足を運ばせたいしい。

そこに本当に変な格好をした俺が倒れていたと言う訳らしい。変な格好と言つても学生服だからそれが変と言うのなら俺達の学校に問合せ願いたいね…と俺は少々苛立ちを感じた。

俺との警官と名乗るおっさんが質問を繰り返していくうちに俺は
どんどん血の気が引いていく感じに襲われた。

今は西暦2507年11月29日だと言つ会話が出来たのが発端だ
った。

『2507年11月29日…』

警官のオッサンの話を聞けば聞くほどコレは夢なんだ…と思えてならなかつた。何を言つていろのかわつぱり分からなかつたからだ。

ひんやりと冷たいコンクリートの様な鉄板の様な…はたまたガラスの様な…簡単に言つとメタルで作られたコンクリートの様な地面だ。そこで俺は胡坐をかいて必死に考えた。

しかし、頭の中を整理する時間すらなかつた。目覚めた時に一緒に居たおっさんの一人がとりあえず一緒に来てくれないかと、座つていた俺の腕をつかんだ。

『ちよ…ちよっと待つてください…!!…どうゆうことなんですか？?』俺は自分でも何を聞いているのか分からなかつた。

『はあ？？君が口で倒れていると言つ通報を受け、我々は来たのだよ？？署まで一回來てもらい色々詳しい事を聞かせてもらうのだよ。』と答えたのは俺に身分証明書を見せてくれた隆一・岡野とか言つぶさけた名前のだつた。

一人の警官に引きずられるよつて俺は彼らの車へと連れて行かれた。

『…これ…なんですか！？』と田の前の車を見て俺は訊いた…いや、車と言つより超小型飛行機！？というのかな？？車体は20センチほど宙に浮き、形はパソコンのマウスのような形をしていた。

『は？？お前記憶喪失なのか？？』隆一・岡野は2割心配そうな田で8割変な物でも見るかのような田で俺を見つめて言つた。

一応、記憶喪失ではないと答え、仕方なく俺はそのマウスのような物体に乗り、テルミナ警察所と言つ所に行く事になった。

車体は俺の想像通り、2～30メートルくらい宙に浮かびあがつて走行した。速度は80キロくらいだらうか…ほんの10分くらいでテルミナ警察所と言つ所に到着した。

走行中、俺はずつと景色を見ていたが、ココが何処なのかは全然分からなかつた。建物は空まで届きそうな高層ビルがいくつも並んでおり、見た感じでは結構な都会だつた。

シューっと音を出しながら車は着陸した。同時に車の屋根にあたる部分がウイーンと全開に開きおっさん達が降りた。

『何をしているんだ。君も早く降りてこっちにきてくれ。』とオッサンに言われるまで俺は動く事ができなかつた。

二人の後ろに着いて歩き、取調室と言つ部屋に案内された。署内の人たちもこのおっさん達と一緒にのような変な格好をしていた。…が向こうは俺の服装の方がよっぽどおかしな格好に思えたのだろう。それ違う人たちに凝視され、変な目で見られた。

取調室の椅子に座るよう言われ、俺は言われるまま椅子に座つた。

『飲み物をもつてくるから少し待つてくれ。』と隆一・岡野に言われ、俺は頷いた。

俺はその待ち時間にそんなに俺の服装は変だらうか????…など

と、どうでも良い事を考えていた。

俺が今、こんな状況でなかつたら奴らの格好を腹を抱えて笑つただろつ…男女共に共通して言える事は露出度が恐ろしく高かつたと言う事だ。

簡単に説明すると、皆水着のよつな格好と言つわけだ。水着にひらひらとなにやら飾りのよつなものはついていた。まあ着飾つた水着だ。もう直ぐ12月だというのに寒くないのかと相手の心配までしてしまつた。

部屋の周りを見ていると驚かされる物があつた。カレンダーのよつな物だ。

【2507年11月】とでつかく書かれていたからだ。どうでも良い事だが、日にちが1日からではなく30日から始まつて、曜日については何も変わらず日曜から始まつて土曜で終わらしい。

【こいつて…本当に500年後…？？？いやいやいや、そんなはずは無い、100歩譲つて500年後だつたとしてもそれは俺の夢の中の話だ。さつさと起きねば…今日も遅刻したら親子面談だ…やっぱいやばい】

ウイーンっと音がなり、ハツと驚き振り返ると奴が居た。隆一・岡野だ。

『ほれ。』と渡された物は四角いパックのよつな物だつた。でも紙パックでは無くなにやら変な素材で出来ていた。少々ひんやりしている。

どうやって飲むのか分からず隆一・岡野の行動を見ているとパックの角を食い、そのまま穴の開いた所からガブガブと飲みだした。

『冷めないうちに飲んだ方が良いぞ』と言われ、少し首をかしげた。どう考へても冷たい飲み物だと思ったからだ。俺もおつさんの真似をして、角を食い穴を開けてそこから飲んだ。

驚いた…こんなに薄い素材なのに入れ物は冷たく、中身は暖かかったからだ。

おつさんは不思議そうに、俺をみて『お前もそやつて飲むのか…私だけだと思つていた…』と呟いた。一般的な飲み方は違うのかよ…と言いたいのを我慢した。

『で??.?.?.お前さんの名前は??.?.?.』といきなり質問が始まった。

俺は嘘偽り無く答えた。『えつと、山岡高貴です。』

オッサンは少し眉間に皺を寄せ、『高貴・山岡君ね。』とつとつしそうに言いつつ、立て続けに何処に住んでるの??.?.?.と四つ質問をしてきた。

『住所は栄に住んでいます。愛知県名古屋市栄です。』と俺は丁寧に答えた。

『はあ…ちよつと頼むよ…真剣に答えてくれないかな…』と隆一・岡野は頭をボリボリ搔きながら呆れたように言った。

と、その時さつさまでダルそうにしていた隆一・岡野が何かに気づ

いたかのように、田をパツチリと開けて俺の方を見直した。

『お…お前…もしかして過去か未来から来たのか…？？？』と少々自信なさそうに訊いてきた。

俺は少し躊躇したが『このカレンダーが正だとすると僕は500年近く前から来た事になります。』と自分の夢に何真剣に答えているんだ俺は…と心の中で恥ずかしく思い反省した。

『「J…Jひやくねん！…？』隆一・岡野の声は裏返っていた。

内心かなり笑えた。椅子から落ちそうなくらい驚きアワワアワワと回りをキヨロキヨロと見て動転しているのだ。

そりゃそうだろ？ 500年前の人物と言つたら俺達の年数西暦2007年から考えて1500年くらいの人物に出くわした事になる。

安土桃山時代…いや戦国時代か…最近の日本史の授業でならったとこだ。

今日の夢は面白い。とニヤニヤと一人笑つてると、隆一・岡野が『本物の異次元人…初めてみた…夢でも見ているみたいだ…』と途切れ途切れに言った。

顔をブルブルと横に振り、こんなに露出しているにも関わらず汗だくの表情で俺に話しかけてきた。

『お前さん…思つたより落ち着いているな…混乱してないのか？？？』と隆一・岡野は椅子の上で正座し、腕を何度も組みなおして落ち着かない様子だった。

『これは僕の夢なんで…その内起きるはずです』と俺は爽やかに言った。

隆一・岡野は考え込むように下を向き、何度も組みなおしていた腕をほどいて、眉間を人差し指と親指でつまんで少しの間黙り込んだ。

『コレは夢ではないぞ…』と人間の顔と思えないほどの形相で真剣に言い放つた。

『いやいや、夢ですよ。』と俺はめんどくさそうに答えると、隆一・岡野は真剣な表情のまま話始めた。

『実は異次元から来た人はお前さんが初めてではないんだ。10年に一度くらいの周期で突然沸いたように現れるそうなんだ。この時代2507年を基準としての過去人、未来人の異次元人がな。初めて現れたのは今から100年くらい前の話らしい。』

『2400年くらいだ。初めてやつてきたのは50年後くらいの未来人だつたらしい。その人は研究のため体をばらばらに分解され再生されを繰り返されたのち、何年にもわたつて監禁されたと言う話をおれは聞いたことがある。』

『その後、10年周期くらいに世界のどこかで異次元人が発見されたと言う事を聞かされたんだ…今までにお前さんを覗いて計9人が見つかっているんだ。10年くらい前かな、俺が丁度二十歳くらいの時だ。』

『インペリアルと言う国で恐らく100年前の人間と思われる人が発見されたのだ。過去最高の異次元記録だつたつと世界中で騒いでいた。ここ50年くらいは異次元人の研究などは最初の身体検査だけになっていたんだ。』

『何らかの病原菌をもつてゐるかをチェックする程度のね。それで、

持つて居なかつたらそのままこっちの世界で生活してもいい。もつていたらワクチンを打つてもらつてからこっちの世界で生活してもいい。まだその人たちの世界に戻す方法が見つかっていなくてね…』

『しかし…』と話を続けようとして隆一・岡野は頭をポリポリ搔きだし言い辛そうな上目遣いで俺を見てきので俺は『しかし??.』と訊きなおした。

『研究材料にされたんだよ…』と隆一・岡野はもじもじと小さい声で言つた。『ふーん。そうですか。』と俺は腕を組み天井を見上げながら応答した。

『あつとお前さんも…』と隆一・岡野が口をギュッと閉じながら言うのがかなりスローモーションに俺には見えた。俺の頭はクエッシュンマークが飛び交つていた。

『今は夢と思つていいかも知れんが2~3日したらコレが現実なんだと思い知らされる。一先ず私の家に来ないか??詳しい事は家でゆっくり話そ。』隆一・岡野は何故か分からぬが俺を家に招待すると言つて出した。

『へーー?..』俺はなんとも情けない声を上げた。

有無言わさず、俺の手を引き隆一・岡野の家へと連れて行かれた。

俺は隆一・岡野といつ男に連れられ訳も分からぬまま彼の家に来てしまった。

さすが500年後の世界…といつのは嘘。ぴょんと車の進化と比べて建物やその他の家具などはさほど形に変化は無かつた。

俺は一応『失礼します。』と言い、靴を脱ぎ…と靴は履いていなかつた。そう言えば芝生に寝転がる前に脱いだんだ…と思い出した。

良く見ると隆一・岡野も靴は履いておらず素足だった。俺は念のため靴下を脱いで部屋に上がる事にした。

まあ適当に座つてくれ。と隆一・岡野に言われ、座布団のような物を発見したので俺はその上にすわった。

『さてと…』と隆一・岡野が話しだした。

約2時間にもわたる長編の話だった。が俺にはあつといつ間に感じられた。

何度も何度も疑問に思つた点を聞きなおしたり、分かりにくい所を何度も説明してもらつたりして8割ほど今の状況が理解できた。

彼が言つた事をまとめると、『本當にこれは夢ではないらしい。今日口で眠り起きたら、2507年11月28日となつているだけ500年前にタイムスリップなど絶対にしないとの事だ。』

現に俺が500年前から来たのだから絶対に無いとは言えないのではないか？？？という質問に対しても彼は君が来たからこそこの先10年は起こり得ないと言い切った。

要するにもう、戻る事は出来ないと言つ事だ…俺も小学生や中学生の頃は何度かタイムスリップや瞬間移動にあこがれたものだが、まさかこんな形で…

彼が言うには俺にとつて戻れないという事はさほど問題ではないらしい。俺は大問題だ…と声を荒げていつた。

【君は恐らく研究材料にされる…】と彼が言いだし、さつきまでも威勢の良い声がひっくりかえり、【え！？！？】っと俺は力なく言つた。

俺の前に来た100年前から来た過去人…俺にとつては十分未来人なのだが、その人が100年もの異次元を超えてきたとの事で特例ケースとし、研究され亡くなつたと言つ話を思い出した。

500年も昔から来た俺は…と泣き出しそうな表情で隆一・岡野に聞いたが、彼は何も言わず黙つて首を横に振るだけだった…

不幸中の幸い…と言うのかな、俺が500年前から異次元移動しここに来た事は彼、隆一・岡野しか知らない。そして彼は俺の公表を控え、ココでしばらくの間、親戚の子として置いてくれるそうだ。

本当にありがとうございます…俺は声に出す事は出来なかつたが心からお礼を言つた。

「コレは本当に夢ではなかつた。

おれが着てから早1週間が過ぎたのだ。最初の2～3日は悪い夢なら覚めてくれ…と祈りながら眠りについた。それも隆一さんの言つたとおりの結果となつた。

『じゃあ高貴、俺は仕事に行くからお前も夜には戻つて来いよ…！』隆一さんが警官の姿で家を飛び出していった。警官の姿…とは1週間たつてもどうも思えなかつた。

俺は昨日初めて外出をした。昨日は日曜と言つ事で隆一さんも仕事がやすみだつた。色々とこの辺の事を聞いたりと隆一さんにとつては災難な一日だつたに違いない。

けど、文句一つ言わず俺の事を弟の様に思つて何から何まで世話をしてくれた。

『俺は一人子でな、弟がどうしても欲しかつたんだ。と良い本当に嬉しそうに遠慮するな』と言つてくれた事には心の底から安心した。

まずは服装…あの格好で街を歩くのは問題だとのことで、コンピューター、パソコンの進化系の様なものをいじつて服を買つてくれた。

誰かが届けてくれるかとおもつたのだが「コンピュータから出来てきたのには本氣で驚かされた。しかしそんな事は序の口だつた。

ご飯にしても変な四角い機械、俺達の時代で言つ電子レンジの様な物に材料費（お金）を居れるとそのお金で作れるメニューが一覧となつて映像に映し出される。それをタッチパネル感覚でタッチするとのの5分で出来上がつてでてくるのだ。

見た目はパソコンや電子レンジだが中身の性能は俺達の時代では考

えられないほど進歩していた。そうそう、予断だがこの時代にはお金の単価が円ではなくペルとなっていた。

俺は今日一人で街に出るにした。露出度80%くらいの服…海水パンツの様な短パンにやけにちやらちやらとしたプレスレットのような物を首と両手首につける。コレだけだ。インディアンを想像していただけだと分かりやすいかもしれない。

コレがこの時代では普通の格好らしい。と言うより若者の男ならもう少し露出している物の方が良いんじゃないか??と言われたくらいだ。

早速俺はそれに着替えた。これまた驚かされたよ。こんなに露出しているにも関わらず凄く暖かいのだ。俺の着ていた学生服なんか比じゃないほどに。

恥ずかしいと言つ気持ちを抑えて俺は図書館に行く事にした。

図書館にはエアバスと言つ乗り物で直ぐにいけると隆一さんが言つていた。エアバスから降りると【^{ライブラリ}図書館まで 300m】と書かれた看板のようなものが立つていた。

ついつい『ライブラリ』って何だよ…せめてライブラリーだ…』と口ずさんでしまった。

それともう一つ、あんなに性能の良い家電が一般的に出回っているのに公共の看板はさほど進化していない事に疑問を抱いた。

看板の指す方角に歩いていると、『よつ……』、『うつす……』

、『おはよッ…』とすれ違うたびに俺と同じくらいの歳の人から声を掛けられた事には少々驚いた。

男性、女性問わず、図書館に着くまでに軽く10人くらいには声を掛けられた。

俺もかけられるたびに『おう……』と応答しているのだから不思議なんだ。500年もの年月が過ぎると人見知りと言ひ言葉は消えるのかねえ…と少し思った。

コレだけ色々な事が変わっているのに言葉だけは全くかわって居ないのは本氣で助かった。

声をかけられる意外は何事もなく図書館に着いた俺は、とりあえず500年前の資料を探した。

図書館とは名ばかりでDVDのような物が棚にずらりと並べてあった。結局自力で発見できなかつた俺は図書館の人に歴史の資料が見たいと言い、貸してもらつた。

借りたディスクをコンピューターに入れ、検索項目に【2007年】と入力した、0・02秒くらいで検索が終わつた。

おもな出来事無し…と画面に出力された時には少々落ち込んだ：

と言つより俺が本来生きるはずの1990年～2090年の100年間のおもな出来事が2つしかのだ…500年も昔のことだ…仕方ないか…と自分達の歴史の教科書を思い出し何となく納得した。

これでは全く調べ物にならないと、俺は図書館を去り速やかに帰宅した。

何もすることがなくただぼーっとしていると『ただいま』と隆一さんの声が聞こえた。隆一さんの帰宅は昨日より遅かつた。

『 なあ高貴！！！お前高校に行かないか！？！？』 と近場の高校のパンフレットを持ち帰っていた。パンフレットと言つてもこれもDVDのようなディスクだ。これで帰りが遅かったのか…

『 高校なんて無理だよ… 土地感も全然ないし、隆一さんは俺の事を500年前から来たつて知つてるから良いけど普通の人は知らないんだしさ。それにボロをだしたら…』 と俺は語尾を濁らせた。

『 何言つてるんだ。お前なら大丈夫だ。勉強をしないとダメだと言つてるんじゃない。学校に言つて仲間を作れと言つてるんだ。俺だって500年前の化石に勉強力なんて期待しちゃいない』 キッパリ言られて少々むつとした。

『 これでも俺はまあまあ名の通つた高校に通つてたんだぜ…』 と少々見栄を張つた。

『 へえ… ちゃんと行つてたのか？？？』 と訊かれ、痛いとこ突かれたなと思いながらも『 おう…！…』 と答えた。

『 じゃあこの辺で一番賢い所に明日面接に行くぞ。』 と隆一さんは嬉しそうに言い、俺は拒否の事すらできなかつた。

と… じつちの世界で今後も生活するしかないのだから知り合いは欲しい。というワクワクする気持ちと、ちゃんとやつていけるのどうか。と言つ不安の気持ちが俺の思考回路を鈍らせ結局、隆一さんに任せ俺は明日高校の面接に行く事になつた。

『 高校か…』

未来に来て1週間が過ぎ、俺は明日高校の面接に行くらしい。

トントン拍子で物事が進み、ココ一週間で色々な疑問を抱きまくった。己の状況把握に戸惑いその疑問達の群れは後回しにされていた。

俺は要約頭の中が整理できるくらいに落ち着いてきた。

隆一さんの家の裏にはにあるやたらヒトカケイ『羽樹の木』。

その木に登り、羽の様に平たく大きい木のベット見たいな枝に寝転がり、500年と言う長い年月を経てもなんら変わることのない…暗い夜空に堂々と輝く大きな月を見上げて俺は一人考えていた。

ゲームや漫画、ドラマやアニメ、そうゆう類で異世界、未来、過去に飛ばされてしまつなどと言う話は良く見たことがある。

俺の中ではフイクション、そう。作り話だと思っていた。しかし、現実に起こってしまったのである。そんな事つてあるか???

ココで俺は残りの人生を過すのか????…高校に通うつて…本当に大丈夫なのかよ…

俺は意外と何でも簡単に受け入れれる性格の持ち主だが、流石にこんな出来事には受け入れるのに時間がかかりそうだ。

そもそも本当に、受け入れて良いのかすら分からぬ…

家族、友人…英明さん…いきなり消えてしまった俺をどう思つているんだろう…

寂しい… という気持ちが炭酸のジュースを振ったみたいに一気に胸の奥から込上げてくるのが分かつた。自分の意思では止める事が出来ず胸の奥から噴出した思いは俺の目から涙となつてじぼれ落ちた。

『ちきしじゅう… 何泣いてんだ俺は…』 齒を食いしばつて必死に涙を止めた。止めたと言うより枯れるまで泣いた。と言つ方が正かもしない。

赤く腫れ上がつた目を擦り、大きく深呼吸し【もう、泣かない】とあの月に誓つた。

『ひょっとしたら英明さんは高貴より驚いたかも知れないな… いきなり隣で寝てた人間が消えてしまつのだから…』

【…………】 といひに俺は体を起こした。

心拍停止を俺は覚悟したね… おまけに研究材料にされるとも。

声の主は隆一さんだつた。

『隆一さんか… 驚かさないでよ… 誰かに聞かれたかと思つた…』

『ハハハ。俺が登つてくるのにも気がつかないなんてよほど集中して考えてたんだな。で、度々で出てきた英明さんってのは誰だい? ? ? ?』

『あつちの世界の兄貴的存在つす。』 と笑つて答えた。

『ふーん。まあ色々と突然の出来事で厳しいかも知れないけど、こつちの世界では英明さんに代わつて俺が色々と助けになつてやる。

だからあまり心配するな。それに高貴は凄いと感づる。』

『えー?』何が凄いのかと隆一さんの話を割いて聞いた。

『そりやお前。500年もの時空を超えて来て、初日に俺と打ち解け、ものの1週間で冷静に考えるほどまで落ち着いてるんだもんな…すげーよ。俺だったら…』と隆一さんはウムウムと頷きながら言った。

正直俺からしても、隆一さんの存在は計り知れないほど助かっている。隆一さんが居なかつたら…あの時の警官が隆一さんはじや無かつたら…やつと俺は…

『隆一さん…本当にありがとうございました…それとこれからも宜しくです。』俺は珍しくしつかり頭を下げた。

『『は俺の居た時代とは全然違つ。この世界で隆一さんに見放されたら…やつは眞面目に生きねば…と自分自身で』の背中を押した。

『まあ…なんにしても、戻れる日が来るまではこの世界で上手く生活するしかないな…』と隆一さんは照れくしゃうにこめかみ辺りをポリポリとかきながら言つた…ボリスだけに…失敬。

『ひこつす…明日の面接は隆一さんも一緒にきてくれるんすよね…?…その…高校の事で色々と質問があるんですけど…』

『そりや。そうだな。学校の事とか何にも分かつてないんだもんな。学校紹介の資料でも一緒に見るか。』

『ういーー』

『羽樹の木』この木は人口的に作られた木らしく、隆一さんは曰く家具の一種だそうだ。俺達の時代にあったハンモックの進化系がこの

『羽樹の木』だろう。

俺が登る時はよじ登つたのだが、羽樹の木は枝が螺旋階段の様になつており、簡単に登り降りすることが出来るらしい。

木を降りて俺と隆一さんはリビングへ向かった。

隆一さんの集めた近辺の高校の資料は7校分もあった。隆一さんが俺に薦めてきた高校はキュリアス学院という学校だった。

選んだ理由は単に「コからの距離が近いと言つ所にあるとの事だつた。…俺としてもその方がありがたい…なんせ俺は朝が大の苦手だからだ。

『ん！？隆一さん。距離だけ考えるとキュリアス学院よりインバルト高の方が近くないですか！？』と地図を見たまま隆一さんに聞き、即答しない隆一さんの顔を見上げた。

『まあ…そなんだが…インバルトはこの辺で最も頭の悪い高校なんだ…仕事とは言えお前の通う学校に行くのは嫌だしな…できればキュリアスくらいの学校に通つてほしい…かなあ…と。』

隆一さんは最後に『まあ最終的にはお前が選んでくれれば良い…』と優しい声をかけてくれた。

『ふうん。そつかあ。じゃあココは無しつと。』インバルトに罰印をつけた。

『キュリアスはどれくらいのレベルなんですか！？！？』と隆一さんはお勧めする高校の学力を訊いてみた。

『キュリアスはこの周辺では3番目だな。中の上といった所かな。』

ふうんっと相槌を打ち、俺は適当に資料を眺めていた。

【どれも、似たような感じの学校だな…これなら隆一さんに任せで、キュリアスって学校に通おうかな…】つと迷った時、俺の目に信じられない文字列が映った。

： 魔法の授業も開始しました ：

俺は自分の歳も忘れ、恥ずかしい事に「魔法と言つ言葉に田をキラキラとさせてしまっていた。

いやいや、それだけではない、もう既に頭の中では魔法を唱えたりしていた…

そう。完全に妄想の世界に入り込みニヤニヤとあれやこれやとやりたい事リストを作り上げていたのだ。

『隆一さん！…俺、ココが良いです。』と熱意を込めビシッつと指差した。

俺の指差す場所を見るなり、『ヒルピネス学院か…無理だ。やめとけ。』隆一さんは即答した。

崩壊した。俺の頭の中で積み上げてきたやりたい事リストたちが、あれよあれよと崩れていった。

500年ものタイムスリップをし、初めてこっちの世界に来て良かつたと感じた俺の夢はものの15秒程で無になつた。仕方ないか……

『やつぱり高いんですか？？？』と俺にとつて諦めるしかない理由の一つはお金問題だ。居候の身分で贅沢など言えるはずも無いからだ。

『いや、金は只だ。国がだしてくれるんだ。言わば入学できた人たちは全員特待生……そういう事だ。』隆一さんは腕を組み、勝手に頷きだした。

『えー、お金かからないなら無理な事なくないですか！？』

『いや……あんまり言いたかないんだけど、よつは口の問題よ。』と隆一さんは右手人差し指で自分の頭をトントンと叩いて見せた。

『おらん。』
『……』
『それに、入学さえ出来てしまえば只なんだが、受験料が鬼の様に高いんだ。一発で受かればかなりの儲けだが、そういう受かる奴はおらん。』

『どれくらいなんですか？？』と俺は少々力なく訊いてみた。

『毎年受験者数でかわつてくるんだが、今年は……75万ペルだ。平均は120万ペルらしい。今年は受験者が沢山居たらしいな。』

* 1ペル = 1円*

『じゅ……受験料でその値段はボッタクリじゃないですか……あまりの高さに声を荒げた。

俺達の時代でも私立、公立、県立、都立、国立……など色々な高校の種類はあつたが、受験料が平均120万なんて高校は全国探しても恐らく無いだろ？…

『まあそれだけ、価値のある学校なんだ。高貴もコレみて決めたのかも知れんがココでは魔法を習う事が出来る。この時代においても魔法の存在は大きいんだ。それに入学さえすればただだしな。』と隆一さんは言つた。

『俺も一回だけ親に頼み込んで受けさせてもらつたが…全然話にならなかつた…』とボソボソととかすれた声で付け加えていた。

恐らく大学生レベル、いや大学のトップクラスの問題が出たりするのだろう…少々、知識には自信があつたのだが…やっぱり無理そうだな。

『んー。そうだな。よし。今年は安いし、一回だけなら受けても良いぞ！…！兄貴である俺が受けでお前が受けれないなんて可哀相だもんな。』とニシと白い歯を出して笑い、『当たつて砕ける』と親指を立てた。

何だろ？この感じ…

好きな女の子と偶然、視線が絡み合つてしまつたかのようだ…ドキリと心臓の右心室と左心室がはじけてしまつたような…兎に角胸打たれた感じだつた。

『いいんすか！…！…？…？…』

『おう！受かつたら受験料も只になるしな。その代わり一回失敗し

たり諦めるんだが。』

『モチツ』とウインクし親指が反り繰り返るモジモンと立った。

『面接試験』

「ひひの世界に来てこんなに田覓めが良かつたのは初めてだつた。…と言ひより受験の事が頭の中を駆け巡り寝るに寝られなかつたと言つわけだ。

今日、人生一回田の高校の受験に挑むのだ。勿論一回田は500年前の世界で受けた。500年前の世界と言うと俺が500歳以上に感じられるのは氣のせいだらうか…

隆一さん^{〔テレボー〕}がエルピネス学院に電話をかけてくれたところ本田の畠からさつそく着てくださいとの事だ。

時間が少しでも出来て嬉しい反面この待ち時間がたまらなく落ち着かなかつた。尿意が近くになり、毎時2回くらいのペースでトイレに足を運ばせた次第だ。

隆一さんにどのよつな分野を勉強すれば良いのかと訊いても『すまん…エルピネス学院ほどのレベルの勉強は俺にはわからん。』と結局待ち時間…4時間ほど面接練習をした。

家族構成は両親と兄が一人。現在は実家でなく兄と二人で暮していると言つ設定。

親元を離れたの理由は『うちの家計は16になると自立するのが決まり』と答えれば良いと隆一さんが言つていた。

何故、今まで学校に通つてなかつたか。その間何をしていたのか。と言つ質問はほぼ間違いなく来るだらうと言われた。

『ええつと。今より500年昔の話になるんですが、如月高校と言ふ高校がありまして、そこに通学していました。その近くにある如

月神社は私の大好きな場所です。『…』こんな事は死んでもいえぬ。いや、言つたら死んでしまう。

そこ所も隆一さんが考へてくれた。平凡かつオーソドックスだが、まあ妥当だらうとのことで、『都会のケルネスト学院を目指すため受験勉強をしていた』とも言えれば良いらしい。

ケルネスト学院とは、俺らの時代で言う東京大学の様なところだ。まあ高校と大学の違いはあるが、その辺は機転を利かせてくれ。

この時代には高校受験のために浪人する事は「よく普通の事らしいので、特に突つ込まれる事も無いだらうとの事だ。

そんなこんなで面接の打ち合わせ（練習）をしてみると、あつという間に昼になってしまった。

いつも通り、隆一さんがボタン一つで料理を作ってくれ、それを食べ終えると、隆一さんの車でエルピネスに向かった。

『うー。俺まで緊張してきた。今日は休暇をもらつて休んでるから受験終わるまでココで待つてるから、バツチリ頑張つて来いよ。落ちてもあんまり気にするな…』と明らかに落ちると思つていろいろしき。

『うー…当たつて碎けてきます。』まあ、面接は完璧だが試験の方は俺自身受かる気がしていなかつた。

校内は高校というよりショッピングモールの様な感じだつた。校舎

のつくりは歪^{イビツ}な形をしていた。分かりやすく言つならば、机の上に生卵をそのままボトッと落としたような形だ。

運動場というものは無く、中庭はびひらかと言つと公園のような感じだった。

校内にも木が植えられていた。これも隆一さんの家にあった『羽樹の木』の一種だろうか。

綺麗に清掃され、掃除ロボットって言うのかな???.掃除機のような物が人の手を借りず自動的に校内をクルクルと回っている。

恐らく汚れセンサーがついていて汚れや菌に向かって移動するような仕組みになつているのだろう。人が近づくと廊下の隅に移動し、人間が歩く分には邪魔にはならないみたいだ。

職員室を目指して歩いていると、この学校の生徒と思われる人たちとすれ違つたびに会釈された、いかにも品のある生徒が多いな。と思つた。

職員室らしき所を発見したので一応ノックし、応答を待つてから『失礼いたします。高貴・山岡と申します。本日受験を受けに参りました。』俺はどつかの侍か…イカンイカン。緊張するな。

『ほんにちはッ!! 君が高貴・山岡君だね。じゃああの子達と一緒に待つて居てもらえるかな??』

俺に声をかけてきたのは、美しいなんて言つ言葉では表現できれないほど綺麗な人だつた。【反則だろ…】

…それにこの格好…この人達にとつてはコレが普通だが俺にとつてはこの露出度は目をそらさずにはいられなかつた。

勿論、俺も立派な狼。目をそらす前に脳と言つ瞬間描写記憶装置によって彼女の姿は一部始終記憶させてもらつたがね。フフフ…

(注) 瞬間描写記憶装置というものは狼の中の狼しか持ち合わせない能力なので君にその能力が無いからと言つて落ち込むんじゃないぞ。

特別に超分かりやすく説明しよう。ミニスカートにブラーー…それだけだ。狼でなくても野郎には十分伝わるだろつ…

おつと…あぶないあぶない。瞬時に色々を考えすぎて先生であるこの人の言つた事を無視しかけてしまつた。

『あの子達と一緒に待つていてくれるかな。』しか聞き取れていなかつた。

すぐさま瞬間描写記憶装置を巻き戻し再生したが…いかんせん。俺が描写したのは…とりあえず俺は『はい。分かりました。』と答え、案内された部屋で待つことにした。

こんな特例の受験と言つのに俺意外にも受験者が居た事には正直驚かされた。【男女ともに一人づつ居た。】

男はどうみてもがり勉タイプのおぼつかやまだつた。肉付きの良い体といい、綺麗にそろえられた前髪といい。何といっても極太の黒ぶちのめがね。

どうやら落ち着かないらしく。左足をガタガタと貧乏振り…乳酸がたりないのかねえ…と見てているだけでイライラしてきそつなタイプだ。

それに比べて女の子は凄く大人しそうな子だった。他の子と比べて若干露出度が少ない事が少し気になつた。…いやいや、変な意味じやなくてね。

俺が目を向けると、頬を赤く染め、露出されたお腹の前で腕組をし、隠した。…太つている様には見えなかつたが…

『お待たせしました。それでは別室に移動しますのでこちらへ。』と俺達を呼んだのはさつきの美人ではなく頭が少々薄い男の先生だつた。

廊下に出て螺旋状の階段をあがり、20メートルほど歩き、頭が少々薄い先生は足を止めた。

自動ドアの横にはソファーような椅子が置かれており、高貴・山岡さんは部屋に入つて、それ以外の二人はココで待つていてください。と言われ、『はい。』と返事し椅子に座つた。

…高貴・山岡さんは部屋に入つて…『つて…え…？！僕からですか！？！？』勢い良く立ち上がり、顔を林檎の様に赤く染め、頭をかいた。

頭が少々薄い先生は眼鏡をかけなおす仕草をし、恐らくマイナス点だろう…と感じた。

『クス…』つと笑い声が聞こえた。俺と一緒に受験するこの女の子だ。俺がチラつと目をやると、逃げる様に顔を下げ、『が…頑張つてください。』と何故か応援してくれた。

『はいッ。』つと俺も応答し、『失礼します…！…！』と元気良く部屋へと入つた。…

…20分にわたる長い長い面接が終わつた。自己評価はさつきのマイナス点を引いても80点はあるだろうと、なかなかの出来だつた。

『次は、美咲・紺野さんを呼んでもらえるかな』と面接官の一人が言い、俺は『ハイ。失礼しました。』と言い廊下に出た。

ダウン症患者の様に全身の力が一気に抜け、ソファーに包まれるように腰を下ろした。

『あ…美咲さんって君だよね。次ぎは君だつても。頑張つて。』と報告し、俺はこの子の名前は美咲つて言つんだ。と頭の中のメモ帳に刻み込んだ。

彼女は、『え…あ…はいっ…!』とかなり緊張した様子で、部屋に入つていつた。…あの調子だと先ほど頭の中のメモ帳に刻み込んだ名前が無意味になるかも知れないな…と少々残念に思えた。

外に声は漏れないような防音システムらしく、ウイーンとドアが開いて驚いた。…俺の時より10分も早く彼女は出てきたのだ。

『失礼しましたッ。』

彼女はソファーに座る前に俺の横に落ち着き無く座るぼっちやんに『新輔・子豚君…入つてくださいとの事です。』と言つた。…子豚つて…（おい。

子豚が立ち上がるり、覚束無い足取りでドアへ向かい。ウイーンと言つ音と共に『失礼します！…………』と校内全域に響き渡つたのではないかと思われるほど馬鹿でかい声で入室した。

『どうでした！？！？』…始めに声をかけてきたのは美咲さんだつた。まさか彼女の方から声をかけてくるなんて思いもしない俺は、

『えッ。微妙っす。』と答えた。

『私も手応え有りとはとてもいえません。…』と小さくため息を付いて顔を伏せた。

『面接の結果は直ぐ出るみたいだし。もし受かつてたら次は筆記で…僕はそつちの方が心配です。』

『私も…面接の練習は色々してきたんですけど…試験勉強は全くで…』

『俺も彼女も苦笑し、長い沈黙と共に子豚が面接を終えてでてくるのを待つた。

力チツカチツカチツと俺達の正面にかけてある、この時代では極レアなアナログ時計がやけにうるさかった。

俺は退屈な待ち時間の間、ずっと秒針を目で追い続けた。そろそろ1000回目くらいの力チツがなろうとした時『失礼しました!!…!!』と馬鹿でかい声と共に子豚が出てきた。

息を荒くし、子豚は俺の横の座れそうにない隙間に強引に座つてきた。このクソ豚…ふざけるな!!…と思ったのは数秒で、押しのけられた俺の体は美咲さんにべつたりひつついた。

災い転じて福となす…まさにこの事。狭苦しいのは正直な感想だったが、嫌な気分ではなかった。美咲さんの香りは良い匂いだった…

この状態が5分ほど続き、ウイーンという音がなり一人の面接官が出てきた。

『えー皆さんおめでとびがります。面接の結果皆さん合格です
で、10分の休憩を挟んだ後、筆記テストとさせてもりいますが宜
しいでしょうか??』

『（（はいっ））… 3人とも綺麗にそろって返事した。

俺は子豚が面接中の1000回ものカチッを数える間に美咲さん
との話題をひたすら考えていた。そして10分の休憩…絶好のお近
づきチャンスと思い『あのお…』と声をかけようとした時。
こともあることか、子豚が俺に話しかけてきた。…といつより俺
と美咲さんにだ。

『この学校の面接はほぼ100%受かるそのので、あまり浮かれ
ない方が良いですよ。』…つるせえ。お前に言われなくとも浮かれ
たりなどしない。

『え！？ そ、なんですか？？』と美咲さんは子豚の会話に参加して
しまった。

『うん。僕が聞いた話だと、面接で落ちたという人は居ない。筆記
試験で9割の人が落とされる。…今年の4月の受験者は2000人
近く居たらしい。』

『2000人！？！？』不覚にも俺も話題に参加してしまつ
た。

『そ、う。でも受かったのは200人程度だったらしいよ。』と子豚
にしては珍しく落ち着いた口調で言い頭を下げる。

『筆記試験…凄く難しいんだね…』 美咲さんまで俯いてしまった。

またしても沈黙の時が開始された。…今度は400回くらいカチツを数えるはめになった。

『お待たせしました。それでは筆記試験を始めますので…中へお入りください。』

面接官に言われるがまま、俺達は立ち上がり、やつを面接をした部屋へと入った。

『筆記試験』

部屋の中に入ると先ほど面接で使われていた机が消えており、代わりに5人用と思われる横長の机が置かれていた。

『それでは受験者の方は一人分空けて座つてください。』… ほうほう。500年経つたこの時代でも原始的なカンニング予防をしようと言う事に少々驚かされた。

【俺。空。美咲さん。空。子豚】と指示され、その通りに俺は一番左端に着席した。

『それでは筆記試験の科目、及びルールを説明いたします。質問時間は話の最後に設けますので説明中は話を割かないでください。』担当の先生が言い、俺達は小さく頷いた。

『まず。試験科目です。国語、数学、化学、社会、英語、魔学です。』… はあ！？！？！英語意外、何を言つているのか俺には分からなかつた。

説明中の質問厳禁と言われた傍から早速質問したくなつたが、試験用紙が配られたら嫌でも分かるだろう…との事でとりあえず質問は避けた。

『なお、6教科で時間は1時間とします。』と担当の先生が制限時間を言つと、なにやらボタンのような物を俺達に配りだした。『開始の合図を出したらそのボタンを押して、テストを開始してください。』

…とりあえず6教科で1時間は短いと思います。と言いたいが我慢。我慢。…何となく子豚が言つていた9割の受験者は落ちるという影が見えてきた気がした。

『次にルールの説明をいたします。そのボタンを押すと試験問題が机に浮かび上がります。1教科1ページで合計6ページあります。右端に出る【次】という項目を選択すると別の科目に変わります。』
『先ほども言いましたが、試験時間は1時間と大変短く、とても全てをじっくりと考えてやる時間はありません。時間分配には十分注意してください。』

『採点基準としましては各科目100点の合計600点分あります。どれをどう解いても構いません。一科目捨てて0点でも他がよければ全然問題ありません。解けそうな問題から解いていってください。』

『最後に。カウンタリング行為、私語、退席、は禁止です。そのような違反行為を行つた場合は即退場で今後5年間はこの学校への受験は認められなくなります。』

以上です。と長々しい説明が終了した。先生は俺達の机の前に置かれた椅子に座り。『質問はありませんね？？』と何故か最後は【かじやなく】ねで終わらせ、質問はしてくるなど言われてる様にもされた。

『あ…あつます…！…』と質問をしたのは子豚だった。

耳をピクリと動かし、眼鏡を少し持ち上げて『子豚君。手短にどうぞ。』と嫌そうに聞いた。

『…合格の最低ラインは何点くらいなんでしょうか…！…』俺ですら何を聞いているのだこいつは。と少し呆れた。

案の定この先生も『それはこちらが判断する事で貴方達が知る必要はありません。』と御もつともな回答を述べた。

『すいません…』と子豚は小さい声で謝罪し、俯いた。

『それでは他に質問はなさそうなので、ソロソロ筆記試験の方を始めます…では始めてください。』と言つと座つていた椅子から立ち上がり、『一時間後に戻ります、皆合格する事を祈っています。』と言つてそそくさと退室した。

流石にコレには3人とも驚いた。個室にぼつりと3人だけ取り残されたのだ。

コレではカணニングし放題ではないか…いや、コレだけの技術が進んでいる時代…恐らく外からでも監視できるのだろうと思い、俺はテスト開始のボタンを押した。

机から電子ペーパーのよつた物が浮かび上がり、目次には国語、数学、化学、社会、英語、魔学と書かれており、やつと受験科目を理解した。…魔学…つてなんぞや。

横目でチラッと美咲さんを見てみたらなにやら熱中し、机をツンツンつと突つついていた。

…凄いな…浮かび上がった電子ペーパーは他人からは存在すら見えない仕組みになつてていたのだ。これだと立ち上がりて彼女の真上から見ないとカணニングは出来ないな。と技術の発展にまたもや関心した。

おつと、イカソイカソ。俺もさつと取り掛からねば。と俺は自分の一番得意な数学からやる事にした。テストは全て選択式で適切と思つものを指で触れば黒く塗りつぶされる仕組みになつていた。

『なッ…………』問題を見て俺は声を出してしまつた。
美咲さんと千賀がチラッとこちらを伺つた。やべえ…

それにしてなんじやこつや…何かのヒツカケ問題か！？！？

…数学の問題は簡単だつたのだ。いや、簡単なんてレベルじゃない。試験官が間違えたのではないかと思つた次第だ。

【問1】 $3 + 1 = ?$?に当てはなる適切な数字
を次から選べ。 A . 1 B . 2 C . 3 D . 4

…はい！？！？考えても分かるはずも無かつた。考える以前にこの問題を見たらハテナは4しか浮かばないのだ。
…つべ。まんまと引っかかつたなど、採点中にでも笑つてくれや。隆一ちゃん…すまねえ。金はバイトして必ず返却する…
俺は馬鹿正直に全問自分が思うがままにポチポチポチとボタンを連打し、数学はものの1分で終了した。

次に得意なのは化学だが、最初から順番にやれば良いかと、国語をやるにこした。…完全にコレは問題を間違えたのだと思つたね。

またしても小学生レベルの問題だつた。

【問1】 桜 いの漢字の部首と思われるものを次のうちから選

べ。 A . 木 B . ツ C . 女 D . サクラ

開始から20分が経過した。

俺は魔学を残し、それ以外の問題は全て終わった。

美咲さんはやんや子豚の様子を見ると、なにやら相当難しい問題にでも取り掛かっているようだつた。

美咲さんは可愛らしく左手の人差し指で自分の頬をツンツンと突付
きながら問題とにらめっこしていた。…一方、子豚は…何故か汗だ
くでウーウーと唸りながら両手で頭を搔き鬯つていた…

どうやら問題を間違えられたのは俺だけらしいな…この場合はずつ
なるのかな… 考えても無駄か…

俺は最後の科目、魔学に取り掛かつた。

【んー?…】

問題は一問だけだつた。

貴方にとって魔法とはどのようなものかとお考えですか?? 簡潔
に述べよ。 と書かれていた。

俺は大きな四角い空欄の中に【夢】と一文字書いて、全ての科目の
テストを終了したのだが、内心は隆二さんには本当に申し訳ない…
と言つ気持ちでいっぱいだつた。

【終了】と書かれたボタンを押すと 御疲れ様でした。次のアンケ

ートに答え、退室したければ退室ボタンを押下してください。 と
書かれた電子ペーパーが浮かび上がった。

アンケート…？…ああ。コレの事か。

エルピネス学院では魔学と言う分野の授業を設けております。勿論、
必須科目ではありません。選択科目です。

魔法と言つものは西洋で生まれた技術だと言われています。

魔法と聞いてあまり良い印象を持たない方も居るかもしれません。
仏の法である「仏法」に対し、仏ならぬ魔の法である「魔法」…そ
れを学業として学ぶと言つのが 魔学 です。

仏法學と言い、回復術、精神術、などと仏法を学業とし取り入れて
いる学校も少なからずあります。近年、エルピネス学院でも仏法を
取り入れていこうと考えています。

仏法と魔法の主な違いは
癒す能力（心や身体の）傷・病気を治す事。肉体的・精神的苦痛
を解消する事 というのが仏法
と
傷む能力（心や身体を）傷・病気状態にする事。肉体的・精神的
苦痛を与える事 というのが魔法

と言つように元々魔法というものは戦争、抗争、などの戦のための
術として使われていたため、人々を不快な思いにさせるものとし、
恐れられていました。

しかし我がエルピネス学院では魔法と言つ素晴らしい技術を世の為、
人の為に使用できればと考えています。
勿論、その術を悪用するか否かは貴方次第です。

興味がある方は後ほど改めて詳細を説明いたします。次のうち興味
がありそうなものを選択してください。

魔術、奇術、仙術、方術、妖術、幻術、呪術、興味無し。

ご協力ありがとうございました。

【や…やべえ…マジでうかりてえ…】アンケートを読んだ第一感想
がコレだった。この受験に合格しなければ、夢のまた夢の話だった。

魔術。幻術。妖術。…とつゝの昔に諦め、心の奥底に潜めた【魔法
への憧れ】が幼年期の時に体中に広がった。

ビィイイイイイー！！！！ つといきなり大きな音が鳴り、心臓を轟
づかみにされたような気分だった。

ウイーンという音が鳴り、振り返ると、さつき出て行つた先生が立
つていた。『皆さん。御疲れ様でした。時間ですので終了してください
さい。』と少し微笑んで言つた。

ああ…もお一時間たつたのか…俺はてつきり子豚が耐えかねずカン
ニング行為を行つたのかと思つたよ。

『それでは、採点をしますので皆さんは一階のロビーの左にありま
す。リフレッシュルームにてお待ちください。』と先生は言い、採
点は30分ほどで終わります。と付け加えた。

『結果発表』

リフレッシュスクールームには俺達意外にもこの学校の生徒が何人かいた。気分的に俺達はリフレッシュスクールームの隅の方に3人固まつて座ることにした。

ここぞ、ひときわ注目を集めた人物がいた。勿論、美咲さんだ。…え！？…違うって！？

周りの視線のその又先を良く見てみると注目を浴びて居るのは子豚のほうだった…『whyy!…?』…

彼が注目を浴びるのも無理はなかつた。

俺や美咲さんはもう子豚の汗っぷりを約2時間くらいにおいてずっと見てきたからもう慣れてしまつていただけであつて、一般の方々からしてみれば冬にこの汗は異常なのだ。

おまけに、この体系…この鼻息…

『what that?/?』と彼女達の心の声が俺には痛いほど聞こえていた。

そんな視線をモノともせず、彼は話しかけてきた。『筆記試験のほう…どうでしたか？？…僕は思ったより出来たのですが、合格しているかどうかは分かりません。』…そうかい。そうかい。

『えつと。私も意外と出来たんですけど…正直自信ありませんね…』と美咲さんが言つたので俺も便乗した。『俺もっすね…』。

『それにしてもこんな時期に3人も受験者が居るなんて、珍しいですね。てっきり今日受験するのは僕だけだと思つていましたよ。』

…へへへっと頭をポリポリと書きながら子豚は言つた。その際髪の毛の先に溜まつた汗が俺の方へと飛んできた。

避けるすべも無く、正面から受け止めてやつた。…勘弁してくれよ…

『そうですよね…。私も一人とばかり思つていたものですから…一緒に受けける人が居て…安心したと言うか…落ち着けたと言うか…あります。』と美咲さんはお礼を言つてきた。

『いえいえ。そんな俺もたまたま一緒になつただけで…』

『いえいえ。そんな僕もたまたま一緒になつただけで…』

子豚と俺…お互いがお互いの顔を見つめた。綺麗に同時だつたんだなコレが…かなり恥ずかしかつたが、おかげで美咲さんの初めての笑顔を見れたから良しとしよう。『アハハハ。見事ですねッ』

『そうだ…！もし…まあありえないと思つんですけど…』と子豚は俺の方をチラツと見た。…『へツ？？』

『もし、口口に居る皆（三人とも）今回の受験に合格したら、どうかでお祝いでもしませんか？！？』…ほつ。さつき俺を見たのは一番受かりそうに無いのは俺と思つたわけだ…。満更不正解でもなさそうだが…

無い無い無い。お前一人でパパやママと一緒に祝えは良いだろ。メンドクサイ事に俺や美咲さんを巻き込もうとするな。もし、口口に居る三人が合格しても、お前との付き合いは今日を持つて終了だ…

『それツ良いですね…！私は賛成です 合格している自信はあります…高貴さんはどおです？？…』…『…高貴さん…！？…？』

『是非ツ』俺は美咲さんに最高の笑みを向けた。…あツ…

『それでは決まりですね。自分の合格は勿論、お一人の合格も心から祈ります。』と、子豚は心底嬉しそうに言った。

そろそろ、『』に来て30分が経とうとしていた。さつきまでいたこの学校の生徒も授業なかいつしか誰も居なくなっていた。

子豚と美咲さんはなにやら結構打ち解け、俺達の時代で『』映画や音楽の話をしていた。

俺はと『』と… 実は俺も音楽や映画は大好きだ。しかしこの時代の事は何一つと『』て良いほど俺は無知だった。そんな俺が一人の会話に参加できるはずも無く…『』『』などと聞かれた時に『』ですよね。』と答えるだけだった。

そんな居心地の悪い空間から俺を救ってくれたのは、試験官の先生だった。『お待たせしました。結果がでましたので』『』と の事だ。

『』せダメだろ？… と『』ながらも、内心ドキドキと胸の高鳴りが感じられた。それは俺だけに限らず美咲さんや子豚も同じだった。

いつたい何処に向かって歩いているのか、そんな事は二の次でやたらと早歩きな先生の後ろを見失うまいと必死についていった。つと思つたら一きなり止まつた。

『それでは合格は3名同時に発表しますので…』

ウイーンと言つ音を出しながら開いたドアの先には恐らくこの学院の長と思われる人がコレマタ偉そうな椅子に座つて俺達を見ていた。

顔つきははどうも日本人っぽく無かつた。置いてはいるが勇ましいと言つか凜々しいと言つか…威圧感があつた。

皆さんは三国志の劉備に仕えた武将、关羽こと、关羽靈長を存知だろうか…知らないのなら是非御覧頂きたい。
彼は正に、关羽だった。关羽の髭の色を真っ白に変えたような感じの風貌だ。

『失礼します。受験生をお連れしました。』…『うむ。』…『…』
は何処の王様だよ…偉そうに…

俺達も『お入りください。』と言われ、緊張の色を隠せず真っ青な顔色のまま部屋に入つた。

『この度は我がエルピネス学院への受験ありがとうございます。私はエルピネス学院長の銀一・ランフォードと言います。どうぞお見知り置きを…』どうやら院長はハーフらしい。この院長のモットーは【教師には厳しく生徒には愛情を…】だそうだ。

子豚と美咲さんが会釈したので、俺も遅れながら軽く頭を下げた。

『それでは待ちくたびれたじやろうし、早速合格発表をするとしよう。我先にと聞きたい人はあるかの?/?/?…と院長の言葉に子豚が拳手をした。

『お願いします!-』力の入った言葉だった。子豚はもう覚悟を決めた様にさつきまでとは打つて変わつてキリッとした田つきだった。

『新輔・子豚君じやな。479点。んー……………合格じや。おめでとう。』…どうやら子豚は合格らしい。まつ、俺からも

おめでとうと言つておひげ。

『え…本当ですか！？…やつた…やつた…』 つと子豚はクリスマスの次の日の朝にサンタさんからのプレゼントを発見した子供の様にはしゃいだ。

よほど嬉しかったのだろう…涙、鼻水をお構いなしで流し、そして最後にはドサクサに紛れて美咲さんに抱きつきやがつたのだ。…阿呆。

俺の逆鱗に触れてしまった子豚に渾身の一撃を脳天に御見舞いした。『美咲さんから離れる…』では無く、『先生や院長の前で騒ぐな。』といかにも正等な意見を言つた。

倒れてもまだ、『やつたやつた。』と言つてゐるんだ、本当に嬉しかつたのだろう。

『フォフオフオ。流石、高貴・山岡君だ。しつかりしておるの。』と豪快に笑い院長は言つた。

『とんでもございません…』 …つて…え？？？…この人俺の事知つてる…？！？…まさか…俺が500年前からタイムスリップしてこの時代に来た事を…？？？

『いやいや、筆記試験を満点で通過した生徒は今だかつて一人もおらんよ。600点。文句なしの合格じや。』 …君のような生徒がうちに来てくれて嬉しことまで言つてくれた。

『はい！？…いや…それは…問題にミスがあつたみたいで…俺のだけ簡単になつていたらしきので…』 …あう。せつかく合格したのに

…何を言つてゐるだ俺は…

驚いた院長は隣にいた試験官の教師に訊いた。

『いえ、そんな事はありません。私は3人が問題を解いている所をこの目でずっと見ておりました。問題のミスなどはありません。』

…と焦つて自分を弁護した。

『テスト問題を口々へ。』と低い声で言ひ、『少々お待ちを…』と試験官は急いでとつに言つた。

ものの数分で試験官が息を切らせて戻ってきた。持つて来たのは俺達が使つたボタンだつた。院長はボタンを押すなり俺を呼び、『高貴君がやつたのはこの問題かね??』と訊いてきた。

全てを見たわけではないのでなんともいえなかつたが見た場所は全く一緒に問題だつたので『はい。』と答えた。

院長の陥しかつた表情が一気に緩み、『すまん。君には簡単すぎたよつじやね。』と笑つて言つた。

俺には何のことやらとつぱりだつた。あの問題の何処が難しいのだ…

一つ頭に浮かんだのは…500年もの年月を経て人間の学力がおぞましく低下した…あながち間違いではないかも知れない。

コンピューター技術が一般化され、全ての事を機械がやつてくれる時代になつてゐるのだから…

俺がいた、500年前の時代ですら、最近の子供の学力の低下を心配していたくらいだ。

まさか…500後はあんな足し算が難しいと思うほどに低下しているとは思いもしなかつた。少なからず俺は恐怖を感じた…このままで人間よりロボットの時代が来るのでは…と。

俺が我に返つたことは、美咲さんの合格発表は終わっていた。結果は合格だった。

美咲さんは自分が合格した事より、俺が満点で合格した事の方がよほど驚いたらしい。何はともあれ、3人ともそろつて合格できたわけだ。

『それとしても…高貴さん…満点だなんて本当にすごいですね…』若干悔しそうに発言したのは子豚だった。

『どうも…』と俺は答えたが、あんな問題満点とったところで何の由慢にもならない…と心から喜ぶ事は出来そうに無かつた。

『今度…私にも勉強教えてもらえます??…私ギリギリだったみたいなので…』

『喜んでッ!!…手取り足取りお教え致しましょう!!』…即答した。…心の底から喜ぶ事が出来た…この時代…ん~ Delicci Ouss!!

『あ!!…じゃあ僕にも教えてくださいよ。』

『断るッ!!…ッ近寄るな!!!!』…即答した。

美咲さんが『クスッ』と笑い、俺も『ハハハ』と声に出して笑つた。同年代の連中と話、笑うのは久しぶりに感じ、嬉しい気分になつた。

『ちえ…』と子豚は残念そうに頭を下げる。…近寄るなは余計だつたかな…と俺も少し反省した。

俺達は皆の合格を祝い、馬鹿騒ぎするべく、体全身で夕日のスポーツトライトを浴びながら子豚の家へと向かった。

『結果発表』（後書き）

お暇な時間であらうと、大切な時間であらうと、私の小説のために時間を割いて読んで頂き本当に嬉しく思います。

私用により11月21日～11月25日までの5日間、今後の小説のネタを仕入れに海を渡り旅にでます。（大嘘）：

ですからその5日間は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

感想は皆から見えるから嫌だと言う方は、私宛へのメッセージでも構いません。

皆様が画面越しに泣き、笑い、そして感動できる様な、小説を書いていきたいと思います。

今後とも宜しくお願ひ致します。

俺がこの時代に來てもう2ヶ月経つのか…
この時代でも雪はふるんだな…俺の生まれた時代に心配されてい
た温暖化も500年後の1月に雪が降れば全然問題ないだろう…と
久しぶりに昔を振り返っていた。

俺の名前は高貴・山岡。都内1賢いエルピネス学院に通う1年だ。
それも学校始まって以来の天才児として一目置かれている。なんた
つて入試で満点だったんだから。

俺と同じ時期に入学した、新輔・子豚と美咲・紺野の二人とは今や
親友だ。

美咲さんの事は初めて会った時からタイプで…簡単に言つと一目
惚れと言つやつだ。当然、現在進行形だ。

子豚とは俺は絶対に合わないタイプだと、初めて会った時に思わさ
れた次第だ。…まず、名前通り『子豚』だ。肉付きの良い体。荒い
鼻息。…一目で拒絶反応を起こした。

それが…俺でも驚いているんだけど、受験合格祝いの時に色々あつ
てな…

受験日の日…俺と美咲さんは帰りに子豚の家でお祝いをしていた。

子豚は思つた通りの金持ちで、家にプールまで着いていやがつた。
俺の兄貴的存在の隆一さんは警察官。馬鹿騒ぎと言つても流石に弁ワキヤえていた。

『（（失礼しますッ。））』と俺と美咲さんは玄関までお出迎えなれった子豚のお母上に挨拶した。

『あらまあ。いらっしゃい。新輔がお友達をお連れするなんて何年振りかしら オホホホホホ。』とまあ 台本の様なセリフを吐き。お母上の関心はすぐさま子豚の受験結果へと向けられた。

『ただいま……受験……合格したよ……』と院長から貰ったバッヂを見せ、これまた恐ろしげほどお母上も感動していらっしゃった。感動するどいろか苛々が募る一方の生ホームドラマは30分続き、その間くそ寒い中俺と美咲さんは玄関にタダタダ立ち廻っていた。

『母さん、友達も待ってる事だしソロソロ……』と俺達に氣を利かせたのか子豚は親元を離れ、ようやく俺達に話しかけてきた。『それじゃあ行ひつか……おっせよ……』

『じゅあお母さん今は今田山かけるからお留守番宜しくね。お父さんも帰りが遅いみたいだし。』『飯は自由に食べて良いわよ。』と子豚と離れるや頃やお母上はお出かけなすった。

『はーい。』

『どうあえず僕の部屋へと案内された。

待て……俺の心中でなにせら嫌な予感が漂いだした。……ましあが……もしかすると……いや、きっとそうだ……そうに違いない……俺はこいつをひと美咲さんに耳打ちした。

【ooooooooooooo...】俺の悪い予感は見事に的中してしまった。…なんと、美咲さんにとって初めての異性の部屋入室が子豚の部屋なのだ…歳16にして異性との忘れない接点を持つてしまったのである。

可哀相に…ああ。可哀相に。心なしか少々美咲さんの顔が俺には雲つて見えた。…それは君の目が潤んでいるからだよ…

汚らわしい糞豚め…ッペッペッペッと子豚の部屋中に睡を撒き散らした。

『ちよ……ちよっと……高貴さん……何するんですか……！僕の部屋で睡を吐かないでくださいよ……汚れるじゃないですか……！』と必死に止める子豚に怒りと悲しみで満ちた目を向けた。そんな事はお構いなしで俺を自慢のベッドへと吹き飛ばし、壁のボタンを押し、床を清掃した。

子豚は床の清掃がすむと何やらへんてこな機械を取り出し、『これ…やりませんか？？』と俺と美咲さんに訊いた。やりませんか？？と訊かれても俺は何のことやら分からぬ…というのが正直な意見だった。

『それ…って…RESSSGですよね…？？私、初めて見ました。』と美咲さんは目を丸くし驚きながら言った。

『これ、この前の誕生日に買つてもらつたんだ…へへへつ』子豚は頭を搔きながら若干照れくわい丈に、はたまた自慢しているかのように言つてのけた。

俺も初めて見たと言つた事で子豚にRESSSGと言つ機械の説明をし

てもらつた。

ERS SGと言つのは【Enjoy Real System Service Game】の略らしい。俺の時代にあつたPS3がかなり進化したゲーム機みたいなもんだ。一言で言つとゲーム機だ。どうやらカセットは無料ダウンロードでプレイ可能らしく、その分このゲーム機本体の値段が恐ろしく高い。まさに金を持て余し、なおかつ時間も持て余す、暇な金持ちゲーだ。

ゲームの種類には色々な物があり、RPG、格闘系、テーブルゲーム…etc…とジャンルは俺の時代とさほど変わりはなかつた。しかし、全てのゲームにおいて言える事は、主人公は自分だという事だ。

このゲーム機は特殊な作り方をされているらしい。

この時代から100年ほど前にタイムマシン（時空間移動装置）の開発を行つていた。何年もの歳月と莫大なお金を費やしたがタイムマシンが完成する事はなかつたらしい。

しかし、その機械を利用し自分達で作成した空間への移動は可能となつたらしい。要は時空間移動は不可だが決められた場所へのテレポートくらいは可能と言つ事だ。

そこで某企業がその未完成タイムマシン（失敗作）を買収し、改良。ERS SGの作成に成功した。

ゲームソフト「^{プレイヤー}」と用意された空間に主人公が転送され、そこでゲームを本格的に楽しむ事ができるというわけだ。

転送といつても瞬間にプレイヤーが消え、別の場所に出現すると言つわけではない、このゲームのコントローラーの様なものを腕につけるとプレイヤーは睡眠状態になり、強制的に夢を見せられる。

皆さんも夢は「存知であろう」。希望・願望としての夢ではなく、眠ると見る夢だ。

夢は人によつてさまざまであり、同一の人でも知覚する現象が千差万別であるが、誰にでも言える共通点がある。

睡眠者（自分）の存在だ。稀に自分の存在しない夢を見る時もあるかもしけないが、殆どの確立で、どんな状況の夢であろうと睡眠者（自分）はその夢に登場する。

睡眠状態に入りプレイヤー^{プレイヤー}が夢を見ると、夢を見る事で作成された自分が、ソフトによつて用意された空間に転送されるというしくみらしい。麻雀のゲームなら麻雀卓にすわつて居る、みたいにな...

俺は思わず『へえ...すげえ』と本気で感心した。美咲さんも可愛らしい口をポカんとあけ驚いている様子だつた。

『まあまあ、説明はコレくらいにして遊ぼうよ。』と俺と美咲さんにもブレスレットの様な手錠の様なコントローラーを渡してきた。仕方なく...と言つのは嘘で、俺はかなり心躍らせ子豚以上に【早くツ！-早くツ！-早くツ！-】と心中で叫んでいた。そんな恥ずかしい俺を悟られぬ様、冷静にコントローラーを着けた。

『どれ遊ぶ！-！-？-！-？』と豚が訊くと、俺は一目散にRPGの欄に目をやり、食い入るよつて画面に張り付いた。

これだ!!!!夢にまで見たリアルRPGができる...俺が子豚にこのゲームが良いと言おうとした時、『これにしませんか！-！-？』と言つ美咲さんの声が響き渡つた。

『ええ... メルティですか...？-』メルティと言つのはトランプみたいな物だ。

『ダメですか...！-？』

【ト...トランプ！-！-？-！...はあ！-？-！-？美咲さん...正氣つか！-？-！-？トランプなんかわざわざゲームでやらなくとも、今ココで

出来るではありませんか…そんなのダメですよ…絶対ダメですよ…】と心中では叫ぶものの声に出す事は出来ず、子豚が断るのを祈った。

『いえ、良いですよ。ではメルティをしますか。』と子豚は嬉しそうに美咲さんに応答した。

何故か俺は子豚に【Fuck off!!】と呴き、睨めつけた。
『高貴君もメルティでいいですか？？』と子豚の問いに『ああ…』と答え深いため息を吐いて腕輪をつけた。

『それじゃあ始めるね…』と子豚は言い、ゲームを選択し開始を押下した。

全身の力が抜け、ふわあっと宙に浮くような感じになり、3人は眠りに付いた。

意識が戻ると、3人は青色の丸いテーブル囲んで座っていた。このゲームには俺達以外にも沢山の人々が参加しており、周りのテーブルでは色々な人がトランプ（メルティ）をしていた。

『ようこそ、メルティシティへ。ゲームの説明はいかがなさいますか？？』といきなり訊ねてきたのはメルティのNPCだつた。
このNPCも実はこの世のどこかに住む人かも知れない。仕事として、ゲーム紹介やディーラーをしていてもおかしくはないなど俺は思つた。

『説明はいいです。』と子豚が答え、俺達はゲームを開始した。ポーカー、ブラックジャック、大富豪…etc…どのゲームも俺の時代にも存在したゲームばかりだつた。

『でも良い事だが、俺はどのゲームでもボロ勝ちした。

トランプ（メルティ）をやりだしてそれから一時間近くが経過し、『そろそろやめてご飯にしますか？？』と子豚が俺達に訊き、『』にてゲームは終了した。

俺達の担当のディーラーにやめると告げると、現実世界で目覚め、ゲームが終了した。

『んーあああああーーー』と座りながら眠っていたせいが肩や首が痛く俺は大きく伸びた。

『どうでした！？楽しめました。！？？』と言つ子豚に俺も美咲さんもYESと答え、子豚は嬉しそうに笑つた。

『飯中…俺達はかなり盛り上がつた。それもアルコールのおかげだらう。

未成年の飲酒はこの時代でもいけない事だったが今日はお祝いと言う事で子豚の両親に内緒で飲み祝つた。

アルコールが回つてくると暴露話、恋愛話、コレはどの時代でも一緒だった。

『子豚との絆』

俺と子豚はこの日に打ち解けた。
酔つた拍子に暴露、暴露、暴露、で色々な事を聞いていたのに意外と良い奴じやん！！つてのが俺の意見だった。
それは恋愛話がきつかけだった。

美咲さんはといつと酔つたせいか、受験で疲れたせいか、素晴らしいスペックのゲームを楽しんだせいか、俺には分からなかつたがリビングのソファーですやすやと眠つていた。

『高貴君は…好きな人とか居ないんですか！？』と言つ子豚の質問に俺の酔いは少し醒めた。

俺は直ぐに美咲さんが頭に浮かんだが俺は『今は居ないな…お前は！？』と話の矛先を子豚に向けた。【何たる事よ…ああ神よ…美咲さんが好きだと言える強い心を俺にください。】

『え！？んー。僕は…僕はですね…』だけの話にしてもらえます！？！？』と子豚は一瞬美咲さんをチラシと見たように思え、子豚が答えるまでの数秒間…俺は殺意に満ちていた。

『ああ…誰にもいわねえよ。』

『じ…実はですね…僕、好きな人が居ますッ！…！…』と大きな声を出し、暴露したことより、その後またもや美咲さんを見た事に俺は子豚に対して死刑執行を下した。

『貴様！……美咲さんの事をいつから好きだつたんだッ！…！…』と

俺は声を荒げて子豚に食いついた。…豚の丸焼きも良し、豚のステーキも良し、豚の角煮も良し…さて、煮て食おうか…焼いて食おうか…。

『へ！？』俺は子豚の好きな人が美咲さんではないということで、安心し痛みを感じなかつた。

『全く…いきなり噛み付く何て酔いすぎですよ…！…おかげで僕は酔いが醒めちゃいましたよ。』

『いやあ。ハハハ！！申し訳ない！！！さあ飲め飲め！！飲んで忘れたまえ！！』と少々キレ気味の子豚ちゃんに俺はワインを注いで差し上げた。

つちえ。と舌打ちし、子豚は注がれたワインを飲んだ。

『あーーーー わつきは居ないと嘆いていましたが、美咲さんを好きなのは高貴君じゃないですか！？！？』…痛い。実際に痛い所を突かれた。

俺は先ほど神に貰い受けた、
【強い心】を活用し、言い放つた。
『まあ……な。』

『えええええ！！本当にですか！？！？…………『愁傷様。』子豚は一回美咲さんを見て、再び俺の方を見て合掌し田を閉じた。

『まつとかー……』……酒のせいで自分でも頬が赤くなっているのが分かつた気がした。

『まあ……応援しますよ……』『の言葉によつて俺と子豚は硬い友情の絆で結ばれたのだ。

この時代だから素晴らしい青春と言えるが、俺の時代でこんな事をしていたら変体だ。無数の星をバックに俺と子豚は握手したのだ。パンツ一丁で……

『俺も、協力するぜ……』『……』

『……? ? ? ? ? とは何ですか? ? ? ? ?』と子豚が不思議そうに訊いてきた。

『お前のあだ名だ。新輔・子豚。それを俺の時代風に読むと子豚新輔だ。子豚のコと新輔のニイをとつてコニイ。』……とまあもつともらし的理由を述べたが、実の所コニシキみたく太っているかい? いなのだ。

『ふーん。ヒーリング俺の時代風に読むとは何ですか? ? ? ? 高貴君の時代とは? ? ? ? ……と子豚に言われ俺の酔いは一気に醒めた。醒めすぐて顔は真っ青になつていて。……しまつたツー……』

『俺・俺の時代って言つ……言つのはな、マイ・マイ・マイブームみたいなもんだ。名前を逆さまにして読むつてのが俺の中ではやりなんすよ。……自分で何を言つてゐるのかさっぱり分からなかつた。

『へえ……変な趣味ですね。ハハハ。コニイかあ。ちがんとしたあだ名つづけられた事無かつたし嬉しいです。今までテブだのブタ

だの……あつがとうござります。』と子豚は心底喜んでいた。

俺のボロに対してあまり突っ込んで来なかつた事に安心した。というのが一番肝心だが、ローリーとあだ名をつけられ喜ぶ子豚が可哀相に思えてきた。ローリーとは遠まわしこトロブ…と言つてゐる様な物だから…まあ良いか。

『お前の好きな子は可愛い子なのか??』

『ええ。僕は綺麗な方だと思いますが…美咲さんが綺麗だと思いますよ。』とニヤニヤとした口つきで俺の方を見てきた。

『まあ…何にしてもお前…もお少し痩せた方が良いぞ…その姿では落とせる女も落とせなくなる…』と俺の事は棚に上げ、子豚を指摘した。

『んー。そうですねえ…頑張つて瘦せますーー!』子豚は少し考え…決心したよつて言つた。

それから約一ヶ月が過ぎた…子豚は例の子と、俺は美咲さんと結ばれ…『高貴君…高貴君…!次の授業は移動ですよー!寝てないで移動しましょつよ。』

…ハツ…子豚と美咲さんの出合いを振り返つてゐる間に寝てしまつていたか…

『全く…何二ヤ二ヤしながら寝てるんですか…気持ち悪い…』俺は…美咲さんと結ばれたのでは…あれは…ゆ…夢か…

『高貴君…聞いてますーーーーーーーー先に行きますよーーー』

『あああ。ローリーか…悪い悪い、俺も行くからひつと待つてくれ。』

』

『 ニーイカ…じゃないですよ…あんな顔、美咲さんにでも見られたりでもしたら…』 と子豚はクラスの女の子と楽しく話す美咲さんをチラッと見た。

『 分かってるよ…つるせえなあ。 一々彼女の名前だすんじゃねえよ。 そつちの方が心配だ。 』 … で俺どんな顔してた?? と子豚に耳打ちした。

『 なにつー? それは酷いな…』 … ビリやら俺は美咲さんが彼女になつたと言つ夢を見ていたらしく、にやけた口から涎を少したたらし、鼻の穴を真つ赤にしてピクピクと動かし、変体そのものだつたらしい。

『 やつですよ… それより次ぎ男子は化学の授業なので移動しましょう。』

『 あれ?? 女子は化学の授業は受けないのか??』

『 今日は男子と女子は別々に実験すると先週先生が言つてたじゃないですか…』 と子豚は俺の問い合わせにめんどくさいつに答えた。

『 ああ。 そつか。』

【 ここの学校に通うことになつて2ヶ月が経つのだが、未だに魔法の授業は受けていない。 魔学と言つのは2年生になつてからと/or 事で何ヶ月経つても2年になれなかつたら受けれないらしい。 1年の俺達はまだ魔学の「魔」の字すら学んでいないのである。 俺は元々2年生への編入学希望だつたのだが、エルピネス学院は編入学を認めておらず、結局俺は1年生として入学する事になつたのだ。 よつて歳は違えど子豚や美咲さんと同学年… そして見事に3人とも同じクラスに…】

化学の授業を受けるため俺と子豚は化学室へと移動した。

化学だけに言えることではなく、全ての教科に言えることなのだが、兎に角学力が酷い…都内の最高レベルの高校にも関わらずやつている事は俺の時代の中学生レベル…いや、それ以下かもしれない。そんな事は受験の時にすすすを感じていたが、授業というものを受けてみて改めて実感した。恐らく、どの教師より俺の方が賢いだろう…とまで思い始めていた。

化学室に着き、子豚と俺は隣に座った。

『今日は何をするんだ??..』

『えっとですね、今日はミジンコという微生物を顕微鏡といつものを使用して見ると云つ実験ですね。なんだか難しそうです…』…ミジンコはこの時代にも居たのか…生命力や子孫を残す仕組みの方がよっぽど知りたいと俺は思った。

そもそも顕微鏡でミジンコを見るだけで実験と言えるのかすら疑問だった。

『ふ〜ん。』と一応返事し、睡眠と言つ名の退屈凌ぎ方法を用いて俺は化学の授業をやり過ごした。

天才と謳われ、初めの1週間くらいは俺も鼻高々の生活を送つていてが、それも段々と虚しくなり、今となつては小学校で授業を受けているようで鼻を高くしている自分が情けなく思うようになつてきた。

テルリテルリテルリンリン。終業の合図だ。俺の時代で云つ、キンコーンカーンコーンだ。今日も一日寝て過してしまった…

『高貴君。今日はお話があるので僕の家に寄つてもらえませんか?』

『…と寝起きで不機嫌な俺に話しかけてきたのは子豚だ。というより子豚以外はめつたな事がない限り俺に話しかけては来ない。』

少々寂しく思う…

『ああ。いいぞ。俺も帰つてからやる事ねえしな。お前の家か…久しぶりだな。』と俺は内心あのゲームがまたできると心躍らせていた。

『ありがとうございます。では急いで帰りましょう。』…『えつと…あの…その…美咲さんはよばねえのか…?』と俺は子豚を見た。案の定笑つてやがつた…

『誘うのは構いませんが、『自分で…』と言われ1分ほど迷つたあげく…やつぱり誘う事ができなかつた。…

『念願のRPG…のために』

『全く…高貴君は情けないっすね…告白するわけでもあるまいし…それも僕の家に誘つだけなのに…ああ、情けない情けない。』

子豚の家へと行く下校中俺はずつと子豚の説教じみた嫌がらせを受けていた。

自分自身でも情けない…と反省しているだけに何も言い返せないのがさらになにを惨めにした。

『そお言えればお前の方はもお誘つたりしてるので??.』…いい加減子豚の説教もうんざりしてきた俺は子豚の恋愛状況を聞いてみた。

『え…?!何がです!?!』

『だからあ。お前好きな子が居るからあの学校選んだんだろ!?!その後の進捗状況はいかほどかと思ってな…』

『いえ、僕はまだ何も。恐らく相手は僕の存在すら知らないと思いますよ。』…子豚はキッパリと言い切った。

『つけ。お前の方が情けねえじやねえかよ。』と俺もきつい言葉をかけてみたが、『僕は痩せてからが勝負なんですよ…』とこれまでキッパリと言われ俺は呆れるしかなかつた。

『ただいま…』

『お邪魔します。』…一応挨拶はしたが、子豚家は俺と一緒に帰宅した子豚以外全員外出中で家の中から応答は無かつた。

手も洗う事無く子豚の部屋へと直行し、『ちょっと飲み物用意するので適当に窓いで居てください』と子豚に言われ、子豚の体系にあつた大きなベットに持たれ子豚の帰還を待つことにした。

ベットに机、クローゼット、窓、部屋の物が全て大きく、こんなに広い部屋が狭く感じた。

「いやいやと物が散らかっている中、ライトアップされたように俺の目に飛び込んできたのはあのゲーム機だつた。何て名前だけな……ああ。そうそう【ERSSG】だつたな。

俺の手は引き寄せられるよつてゲーム機へと運ばれた。

『お待たせです。』カレンジジユースしかありませんでしたが、どうぞお飲みください。』と子豚は上品そうに二つのグラスをわざわざオボンに乗せて運んできた。

『……あれ？？ERS SGやりたいんですか？？』……と俺の田の前に置かれたゲーム機を見て、子豚は言った。

『ああ、前にやつたときからやつとやつたくてな……俺RPGは田
が無くて……あの日からずっと頭の中でやつたりしてたよ……』

『ええ、じゃあ僕の家に遊びに来てくれれば良かつたのに…』

『いやー俺は毎日暇だなー前のことの上やね父上、迷惑がかかつてしまつだらう。』

『いいんです。僕には友達と呼べる人が高貴君しか居ません。そんな大切な友達が来る事を両親が拒んだら僕が許しません。』……俺は

何だか悲しくなってきたよ…頑張れ、子豚。

『やつゆひー』となら…じゃあ…遠慮なく来るところよ。…で、今日は何か用でもあったのか…？！？』

…まさか俺が全然遊びに来てくれないから寂しかったなどと言いく出すんじゃ無いだろうな…そんな気持ちの悪い事、言い出しあがつたら俺はもう一度との家の仕切りは跨ぐまい…

『来週、校内テストがあるので勉強を教えてもらひおひと思いまして。呼びました。…俺は正直安心した。…数秒ね。

『ふ〜ん。つてお前なあ…お言ひ事は来る前に言えよ…』

『ですが、僕がテスト勉強を見て欲しいと言つたら来てくれないでしょう！？』

『ふむ。御尤もだ。』

『じゃあ、告げずに誘ひしかないじゃないですか。』

『あほか。俺は帰る。ミカレンジジュー、ありがとな。じゅつ

『ちよ。ちよっと待つててくださいよーーーー！』

…と子豚は俺の足にしがみ付き、いまにも泣き出しそうな目で俺を見つめてきた。…そんな目で俺を見るな。お前にそんな可愛い瞳を向けられても気持ち悪いだけだ…

『ああもおわかつたよ…その代わり、俺が今後ゲームやりに毎日のように訪れても文句言ひなよ！…？？文句言ひたらゲーム機を持って帰るからな？？』

子豚はブルブルブルと顔の肉を揺らしながら首を振り、『はいッ！文句など言ひません！』と嬉しそうに答えた。

『コニーイ…子豚よ。今更だがお前は何で俺に敬語で話すんだ？？？』
：俺は何気ない疑問を子豚にぶつけてみた。

『え！？年上の人に対する敬語で話すのは当たり前の事ですか！？』

？』

『なるほど…』…年上とか気にするわりには名前は君付けで呼ぶの
ね…まあ良いか。

子豚はさつそくテスト勉強をするらしい。

小さいちやぶ台を出し、ノートと教科書を広げ、鉛筆を鼻の下で挟み悩んで…って言つるのは俺の時代のテスト勉強であつて子豚達の時代の勉強方法はまた違つたものだつた。

木製なのかアルミ製なのかジエル製なのか分からぬ小さな机を出し、その机についているボタンを押すと氣体状で出来たエアーモニターが浮かび上がつた。

そのモニターに自分達の通う学校のバッヂを^{カザ}翳すと【エルピネス学院…読み込み中…】と言つ文字列が表示された。…読み込みが終わると、俺達の学校のシンボルが映し出された。

子豚がモニターに向かつて『3期、校内テスト、仮問題集…』と話しかけると【サンキ、コウナイテスト、カリモンダイシユウ…了解シマシタ。】とモニターからの応答があつた。

【Now Lordin g…】となり画面が暗くなると、2~3秒ほどで問題が表示された。

『な…なんだこれ…？すげーなあ…』

『え！？知らないんですか！？！？もしかして高貴君…勉強とかした事無いんですか？？…どうやらこの作業は俺達が教科書を片手

に勉強するような事と同様でこっちの時代では当たり前の事らしい。『あ、いや、その…』と俺が何て言い訳しようか考えていると『まあ高貴君の場合勉強をした事がないと言われても不思議じやありますせんが…』と子豚が勝手に勘違いしてくれた。

ハハ…と適当に苦笑し、モニターを覗いて子豚がやるうとしている問題を確認してみた。

『ふむ。数学からやるのか。』

『ええ。僕は数学があまり得意でないので、長い時間かけて勉強しようと思っています。』

『そう。がんばって。』

…入試の時よりは多少難しくなっていたが、それでもまだ掛け算と割り算…というレベルだった。

俺の役目は子豚が勉強を終えるまでの3時間、ただひたすら待つ、子豚が分からぬ問題があつたら俺は教える。子豚の勉強が終わるまではゲームもお預けと言うわけだ。…それにしても3時間って…長いな…

子豚は早速、分からぬ問題にぶち当たり、俺の肩を揺すつて質問してきた。

『高貴君…この問題なんだけど…』…見えてみると【 $3 + 4 \times 2$ = ??】と書かれていた。

『ふむ。これの何処が分からぬんだ??』

『いや、分かるには分かるんですが、答えが合つてないんですよ。それを分かつていないと言つのでは無いのか??』

『僕が解いた答えは、【14】なんですが、答えの確認をしたら【

『1-1】と書かれているんですよ…』『ノット答えるミスですかね？？』

『いや、俺が解いても【1-1】になるだ…お前【3+4】を先に計算しただろ。』…『うん。そうですね。』

『計算式に掛け算と足し算があった場合は（ ）で囲まれていない限り掛け算が優先されて先に計算するんだ…』

子豚は数学の先生が言っていた事を思い出したかのよう『あ…』と声をあげ、『ありがとうございます。』と再び勉強に戻った。何度も同じような事で呼ばれたくなかつたのもあり、『引き算も割り算も同じだからな』と先に教えてやると、『そんな事知つてますよ…』とクソ生意気な口調で言い放つた。はあ…少し寝るか…

『高貴君。高貴君。起きて下さい。』

『あ…？？勉強終わつたのか？？？』

『はい。勉強終わつたので、そろそろ帰つてください。』

『なあにいい…！…』と怒りをあらわにしようとした時『『冗談ですよッ！…ゲームでもしますか。』と子豚は笑いながら言つた。

『冗談か…もお用無しで追い出されるのかと思つたよ…』…やつと念願のリアルRPGが出来る…俺は秋葉系アイドルのアキハバラ・モエちゃんにキスしてもらえるオタクの様に…失敬。例が悪すぎた。ヒーローに握手してもらえる子供の様に俺は目をキラキラと輝かせていた。

『その前に、最後に一つ質問して良いですか？？？』
『なんだ…』…人の綺麗な妄想を粉々に碎きやがつて…

『高貴君はそんなにぐーたらして、いかにも頭が悪そつなのに、何故勉強が出来るのですか？？？』

『子豚よ…俺に喧嘩を売っているのかい？？？』

『いえ、ずっと前から気になっていたもので。』…子豚には悪気など全くないという事は百も承知だつたが、一発頭に拳骨をお見舞いし、『影で努力しているからだ』と大嘘を付いた。

『頭が良いのは納得できたんですが…殴られたのには納得できません…』と子豚も俺の頭に拳骨を食らわしてきた。

数分取つ組み合いになり、お互の体力が切れたことで、仲直りの握手をし、ゲームをする事になった。

『RPGと言いましても色々ありますがどれにします？？？』

幼児期にどれくらい夢見ただろ？。いや、俺の場合は幼児期に限らずつい最近まで夢見ていた。ドラマ、漫画、ゲームの世界にいったら…と。

決して果たされる事の無い夢の一つだった架空世界へのリアルアクセス。そして俺は、俺達の時代の誰もがつらやむ夢のアクセス権を手に入れたのだ。

『高貴君！――で、どのRPGをやるんですか？？』…おっと、つい妄想に夢中になってしまっていた。

『ああ。悪い悪い。ニーマのオススメはどれだ？？？』
『オススメと言われましてもねえ…実の所、僕あんまりRPGとかやった事無いんですよ…』
『ふむ…』

約2000種類近くあるRPGの中から選べと言われても中々選びきれなかつた…しかたないので、ネットで皆のオススメを探してみた。

『一位は「ネクシヨン」って言うゲームか…』
『そのようですね。コレにしますか？？？』
『いや、コレは2位のゲームをしよう。』
『え！？どうして？？？』
『俺の中で勝手に思つてゐ事にすぎないんだが、ゲームに限らず1位を飾つてゐるには裏がある氣がしてな、例えば大量の宣伝をしてるだとか、作つた会社が有名でその会社の名前で人気になつてると

かな。と翻訳で2位の【The Continuance Of Dream】でもやるとしよう……名前も「ネクション」に比べてかつこいいしな。』

『はあ……おゆう考えだと結局2位も同じだと想つたですけどね……まあ僕は何でも良いですよ。』

俺の変な理由により一番人気のゲームではなく2番人気のゲームをすることになった。

子豚がそのソフトをダウンロードし、一人ともコントローラーであるブレスレットを嵌^ハめ、眠りについた……

直ぐに別世界に居るのが分かつた。広く薄暗い空間に俺と子豚だけが居た。

ここはもう既にゲームの中だらう。隅の4箇所に立つ電灯は大きな鐘の様なベルの様な形をしており、ゆっくりと揺れていた。

通所の鐘は揺れる事により音を出すのだが、こここの世界の鐘は揺れる事で光を放つていた。鐘の音を出す根源となる中央の玉が鐘の淵に当たると水しぶきの様に光の粉をばら撒いていた。

『すげえ……マジで幻想的だな……』

『ええ。本当に凄いですね。』

少しすると、俺達の目の前に何やら看板らしき物が、地面から一弾キ一弾キと生えてきた。

『わあ……な……何だこれ……モモモ……モンスターですかねッ！

？！？』

『いや、どう見てもただの看板だる。それにこの看板【 New Game (初めて) = = = Continuance (続き)】

はあ……そおゆう考えだと結局2位も同じだと想つたですけどね……まあ僕は何でも良いですよ。』

】って書いてあるや。』…学力が低下しているとは言え、あんな簡単な英語にも日本語の振り仮名が付いてるのには驚かされた。

『あ… 本当ですね。僕達は初めてなので左ですね。』

そうだな。つと俺と子豚は看板の矢印の方向へと進んだ。俺達の進み道はさつきの電灯鐘ライティングベルの光の雲が俺達を導いてくれた。

手を引かれる様に光の示す道を進んでいくと、俺の身長の3倍程の大きさの洋風のドアがあつた。

『コレをあければ良いのかな！？！？』

『はい。ココ以外に進むべき道はありませんしね。』子豚は周りをキョロキョロとみながら言つた。

大きさとは裏腹に扉は俺が少し力を加えただけで ガガガガガガッ という音をあげながら開いた。

【『よつじや、 The Continuance Of Dream …夢の続きや。私はこのゲームの案内役オペレーターの【ミコア】と言います。アクセス場所が日本という事ですので、出力言語は日本語で宜しいでしょつか？？？』】

扉の向こうに居たのはどうやらこのゲームのオペレーターらしきミリアと名乗る小悪魔っぽい女性だった。

『え！？まあ…はい。』と子豚が戸惑いながら答えた。

【『それではゲームの説明に入りますが、宜しいでしょか？？』】

ミコアさんの問に『はい』と答える以外の回答が思い浮かばなか

つたのでセオリー通り『はい』と答えた。

【『それでは……』…『ジ…ああ、…ああ、…え、ツホ…！カーッペツ…！…失礼いたしました。』】…可愛らしい顔のわりにやる事はオッサンだな…と俺と子豚は顔を見合させ苦笑した。

【『このゲームは二人一組で行つゲームとなつております。概要としては、私がプレイヤーを ドリムリミット と言う世界の ウルチ へ転送します。そこからプレイヤーの皆さんにはドリムリミット最大の夢の街、 コーティリティーシティ を目指し旅をしてもらうというゲームです。【姫を救うために】だと、【世界の平和のために】だとか言う目的は一切ありません。ただ、コーティリティーシティを目指すだけです。』】

【『以上で主な説明は終わりますが、質問等はございませんか！？』】

俺とほぼ同時に子豚が挙手をした。そして子豚が指された。

『えつとまずスリーマンセルとおっしゃいましたが、僕達は一人しか居ませんが…それでもプレイできるのですか？？』…うむ。俺が聞きたかったうちの一つだ。

【『それは勿論ツプレイ可能です！！足りない一人分はこちらがNPCを用意いたします。人工知能を積んだ特殊生命体のNPCなので普通の人間と変わりません。NPCはNPCですが 知らない人とも思つていただければ結構です。なお、最初に一人で登録されると、後々に一人追加し自分達で用意した三人でプレイしたいと言われましても、それは出来ませんので良くお考えの上、開始してください。』】

『複数人…一人以上で始めた場合は、続きをプレイする際に一人でもプレイは可能なんですか？？？…子豚よ、良い質問だ！！

【『一人でのContiuationは認められておりません。登録された人数、そして本人である事を確認してからContiuationをプレイする事が出来ます。』】

『だそうですが…どうします？？？』と子豚は俺に質問してきた。
『どうするも何も、一人でやるしかないだろ？？？』

『僕…まあ…おせつかいかもせんが、美咲さんを誘つてみたらどうでしょうか？？？』

『はい！？』…子豚が突然【美咲】と言つ単語を出してきた事に驚き声が裏返つてしまつた。

『恐らく、このゲームは長くなると思います。そこでですね、美咲さんも一緒にプレイすれば高貴君との関係も今より良くなるのでは…と考えたのです。』

『お前つて奴は…ホントおせつかいだ…が良い奴だな…美咲さんがOKするなら俺は是非その3人で旅がしたいが…』

『では、明日。学校で聞いて見ましょう。当然誘うのは高貴君ですよ…？』

『…ああ。分かつたよ…』

『ミコアさん。質問を再開しても良いですか？？』

【『はい、どうぞ。』】

『僕達が最初に転送される、ウルチと言つのは何ですか？？？』

【『ドリムリミシートの中にある一つの街の名前です。その街へ転送するのです。』】…なるほど。最初は野原とか森の中ではなく「親

切に街に転送していただけなのか。

『僕からの質問は以上です！！高貴君は何かありますか？？？』

『ああ。俺から一つだけ聞きたい事がある。こっちのゲームの世界での俺達の体力はどおなるんだ？？走ったり、戦ったり、時には死んだりもするんだろ？？？』

【『はい。勿論、どれもこのゲームをプレイする上で一度は体験すると思われます。走ったり、戦ったりはそのプレイヤーの基礎体力に委ねられます。そしてこの世界で学んだ事は現実世界でも生かされえきます。例えば、走ったりすると現実世界で疲労は蓄積されます。しかし、戦つて傷ついた体に関しては現実世界には全く影響されません。ゲーム中は傷ついたりすると体が重くなり動きにくくなるという現象が起ります。最後に死亡してしまいますと、現実世界にも影響してきます。』】

『（（えッ！？））』

【『安心ください、ゲーム内で死亡した場合は現実世界で目覚めてしまつと言うだけの事です。』】

『なんだ… それだけか… 焦つたよ…』

【『しかし、複数でプレイする際にプレイヤーの誰か一人でも死亡してしまいますと、死んでいないプレイヤーの方も現実世界で目覚めてしまつので注意してください。それと、死亡により強制的に現実世界へ戻された時は戻されてから1-2時間はプレイ不可となつておりますのでご了承ください。以上です。』】

ミコアさんは、ダラダラと説明し、俺達がもう質問はありませんと言つと、【『最終確認です』】と言い、二人でプレイなされますか？？？と訊いてきた。

結局、俺は子豚の提案に乗る事にした。俺としては正直美咲さんが一緒にゲームなんてしてくれるとは思つていらない。

…がこのままクラスメイト止まりで終わらせたくない…と、俺にしては珍しく心の中で恋の炎が燃え上がつていた。

『では明日、美咲さんに聞いて見ましょ。もしダメだとしてもその時は一人で友情を深めましょ。…絶対に嫌だ…

11話までの御閲覧ありがとうございました。

お暇な時間であるつと、大切な時間であるつと、私の小説のために時間を割いて読んで頂き本当に嬉しく思います。

大変、身勝手な事なのですが土口は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

その分平日は頑張つて更新していきたいと思います。

皆様からの「」意見、「」感想、「」指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

感想は皆から見えるから嫌だと言つ方は、私宛へのメッセージでも構いません。

皆様が画面越しに泣き、笑い、そして感動できる様な、小説を書いていきたいと思います。

今後とも宜しくお願ひ致します。

『僕の女神を求める』

「後日…俺は早速美咲さんを僕らのヒーラーを勤めてもらひすべくお誘いを申し入れる事にした。そう、The Continuance Of Dreamというゲームを一緒にしませんか！…？」と囁つお誘いだ。

皆さんはどうかしらんが、俺は今までの人生でゲームと一緒にしませんかと女の子を誘つた事が無く、どう声をかければ良いのか迷つていた。

【美咲さん…！子豚の家と一緒にゲームしません！…長編RPGですよ！…】…苦笑され可憐らしい声で【遠慮しちゃます（汗）】と言われるに違いない…

じゃあこれか…？【美咲さん…！今子豚の家で勉強会してるんですけど、美咲さんも一緒にどうつすか…？】…これなら来てくれそุดが、勉強が終わり次第帰宅も考えられるな…

「…」は単刀直入に…【美咲さん、僕達…いえ、僕の傷を癒してくれる女神になつてもらえませんか…？】…【ええ、勿論 私はいつだつて高貴君の女神ですわ】…ぐふふふ でへへへへ もしコレがOKなら…『…って言えるかあ…！…！…！…変体か俺は…』

『十分変体だと思いますよ…』

『…！…子豚…変体とは失敬な…！…』

『…すけど、教室の角で…ニヤニヤしたと思ったら険しい表情になつたり…ブツブツと呪文でも唱えていたんですか！…？…？…』

『「ひっ……』どうやら俺が美咲さんへのアプローチを考えている姿を見られてしまつてこたらしこ……よつこみつて子豚に……

『ほひり……歯も引いてますよ……』

『なに……？』教室を見回すと女の子グループがこちらを見てクスクスと笑つてゐるでは無いか……一人一人の顔を纖細にチェックし美咲さんではない事と美咲さんのお友達さんでは無い事を確認しほつと一安心した。

『IJの調子ですとまだ美咲さんを誘えてないんですよね……』……『うるべーほつとけ……』

『高貴君に任せていたらあのゲームが一生できない気がしてきましよ……』……『グサ……そッそんな事……みなまで言わないでくれ……』

『まあ安心してください、美咲さんなら僕が先ほど誘つておきましたよ……』……『そうか……つて……え……？……？』……『IJについては何を言つているのだ！？！

『だから、美咲さんはもう僕が誘つたので高貴君が誘つ必要は無いと言つたんですよ。』

なに……IJやつ……できる……じゃなくて……美咲さんを誘つただと……？何でこいつは後先考えず行動してしまつんだ！……断られたらと言つ事を少しは考えてくれよ……

大体こんなヲタクの教科書みたいな、なりの氣色の悪い生命体にお誘いを受けてOKをする女性が何処に居るつて言つんだ……おまけにゲームと一緒にしませんか！？！……だぞ！？

俺はキリッ」と子豚を睨めつけた。

『高貴君。聞こえますよ。ブツブツブツヒヤツキから、『氣色の悪い生命体で悪かったですね…』

「あ……いや……その……しきなりケームを説いたりしたら気持ち悪い……って思われるかもしねないな……ってさ……！子豚は俺の大切なダチだし子豚が嫌われるのは俺も辛いんだよ……』俺と子豚……どっちが気色の悪い生命体なのかわかりやしないな……」

『そんな心配結構です！！！それにさつきの言い方はそう言つ風に聞こえませんでしたが…まあ良いでしょう。ちなみに美咲さんはOKしてくれましたので、今日の学校が終わつたら3人で僕の家で遊ぶ事にしておきました。』

『へ？？』…予想外の展開に思わず変な裏声を出してしまった。

だからあ……今日の放課後に……」

「何がですか？」

『だから、マジで美咲さんはOKしたのか！？』

『マジですか。ちゃんと黙られてるんじゃないですか…』

『ホントにホントか！？！？』

本邦に本邦です

『本当に本当に…つてクドイ………』

…ありがとうございます。貴方様の「」期待に応えるべく日々精進します。

『あ…言ひ忘れましたが、流石にテストが近いのですつとゲームして遊ぶとわけにはいかないようです。』

『ン？！…どうゆう事だ…？！…』…子豚は俺の妄想ワールドを打ち砕いて話かけてきた。

『高貴君は僕と美咲さんの勉強を見て、そのあと遊ぶのです…！』

『まあ良いが…一つ質問して良いか？？？』…『ええ、どうぞ。』

『美咲さんは大歓迎だが、何故俺はお前の勉強まで見なきやならんのだ？？？』…『あ…そうですよね、高貴君にとつて僕を教える必要は全くありませんよね。じゃあ僕一人で勉強しますので、美咲さんには先ほどのお誘いをキャンセルしてきます。』

『子豚ちやああん そういう意味で言つたんぢやないでしょ 子豚は賢いから俺が勉強を見る必要があるのかしら！？と思つただけですよ…！』…『そ…そうだつたんですか…僕はてっきり邪魔者扱いされているのかと…』…子豚は賢いと言ひ言葉に敏感に反応し、照れくさそうに謝罪した。

つけ。御名答だつたんだがな。こんな事で美咲さんとの勉強会及びゲームデートをおじやんにされてたまるか…差し詰めこいつには好きな子が居るようだし、俺が美咲さんに好意を持つている事も知つてゐる、流石にYK…おつとコレはソロソロ古いな…空気が読めなも過ぎる』…こいつでも俺と美咲さんの邪魔だけはしないだろ？…

子豚とThe Continuance Of Dreamつてどんな感じのゲームなんだろうな？？？と想像に身を任せて話していく

ると「キーンシ「ローンカーン」「ローン」メンドクサイ授業が開始した。よりによって数学だ……いや、こりや算数だ。

今日の授業の内容は三角形の面積の求め方……こんなくだらない事より、【三角関係の恋愛の解き方】をおしえてほしいね。

しかしああ、くだらないとはいえた男女共同授業、一生懸命勉強してらっしゃる美咲さんを誰にもじやまされず見学できるのは、俺にとって幸せな時間の一つだった。

彼女にとつてはそんなに難しい問題なのか、たまに悩んで頭を搔く仕草がたまらなく美しい。

こうやって長時間にわたって見つめていると……ほり。向こういつも俺の視線に気付いて俺の方を振り返る。俺はニッコリ笑つて手を振つた。

高貴！……高貴よ！……俺の中の善良な高貴が俺に話しかけてきた。

手を振つたじやねえよ。完全にストーキング行為ではないか、変体を通り越してこれは犯罪だぞ。

お前が……いや俺が……いやお前か？？……いや俺だ。まあどっちでも良い、高貴と言う人間が美咲さんの事を好きな事は俺自身自分の事の様に分かるが、このままだと嫌われてしまつぞ。ジロジロと見られて気分の良い子なんてそうそう居ないのでだからな。

あ……あぶない。俺は善良な俺の意見を聞かなかつたら危なく犯罪者になる所だつた……

こうして、くだらない授業をくだらない妄想によつて終業を向かえるのはいつもの事だつた。

授業が終わると子豚がこつちに来た。

『また授業中、美咲さんを見てたでしょ……全く……つけ、バレ

バレか…ってお前は授業中にも俺の方を見てたのか…？…気持ちが悪く体中に寒気が走った。

『ああ。気をつけるよ…お前も俺の観察してる暇があつたら勉強しろよな…。』

『しつ失敬な…僕にはそんな趣味ありません…たまたまチラッと見たら高貴君が美咲さんの方を見ながら一ヤ一ヤとしてたので【友・達】として注意したまでです。』…『さよか…』

『ところでお前、良く美咲さんをゲームに誘えたな？？？…まさかお金を上げたりしてねえよな！？』

『はあ！？…あのですね。それは僕だけでなく美咲さんにも失礼ですよ。貴方が一番ご存知でしょ？に、美咲さんがお金で動くような子でないと。』

『…忝い…』…俺は子豚の発言に胸打たれ、愚かな自分を呪つた。

『まあ誘うのは意外と簡単でしたよ。単純に僕と高貴君と美咲さんの三人で The Continuance Of Dream という R P G ゲームを一緒にやりません！？…と率直に聞いただけです。』

『…でも…それで良く断られなかつたな。』

『ええ。まあ。実は…前に僕の家で美咲さんを含めて3人でお祝いをした日があつたでしょ？？』…『うむ。』

『あの次の日に美咲さんから今度は三人で R P G をやつてみたいと聞いたもので…それで昨日ゲームの説明を聞いている時に3人1組と聞いて美咲さんを誘つてあげようと思つたんですよ』人差し指を立てながら名探偵が犯人を暴く時に様子子豚は自信ありげに言つ

た。

『ふ〜ん。 つて事は美咲さんもやりたがつてのか…』

『まあ僕が思うに彼女は相当ゲマー一ですよ。 でもそれを隠してバ
レナイ用に生活している。 まあ女の子がゲマー一つてのは響きがあ
んまり宜しくないですからね…』 … 頷きながらとりあえずゲマー一
とはなんぞや?? と俺は子豚に聞いた。

え! ? そんな言葉も知らないんですか! ? とまるで原始人でも見る
かのような目… と言つても原始人を見ている人の目を見た事が無い
からそんな事は言えんな。 まあ子豚はかなり驚いて突っ込んできた
わけだ。

ゲマー一とはゲームマニアの事らしい。 何となく言われれば分かる
がどうしてゲマー一では無いのだろうか… まあ要するに彼女はゲー
マーと言つわけだ。 これで要約、話が繋がった気がした。

俺は、まだかまだかと溜まりに溜まつたストレスを本能的に解消
しようとしているのか、震度1弱の貪り揺すりをし、一時間目、三時
間目、四時間目… 飯食… とひたすら放課後の楽しみを待ちわびた。

そして、長い長い待ち時間に終止符を擊つ鐘の音。 キーンコーンカ
ーンコーンが鳴った。

『よつしゃーー』

『3人で遊ぶのなんて久しぶりだね』……放課後に真っ先に声をかけてきたのは美咲さんだつた。

美咲さんの発言通り、俺達3人で遊ぶのは受験日以来、今日が2回目である。と言うより、俺と美咲さんが遊ぶのが2回目だ。学校や帰り道とかでは話したりもするのだが、お誘いの言葉が中々かけられず結局今日まで……今日も子豚のお誘いか……そう言えば受験の時も……

と、まあ今日まで誘いたくても誘えないなんとも心苦しい状態が続いていた。俺はコレを機に是非美咲さんとの交友……いやいや、大恋愛を成就させるためにも縁を深めようと思つ。

良し……は男らしくバツチリ決めてやるぜ……

【おう……言われてみれば久しぶりだな……でも、俺は久しぶりだ何て言われるまで気がつかなかつたな……】俺

【えっ????どうして！？学校で毎日の様に会つてるから？？？】

美咲さん

【ツチツチツチ……確かに、それは無いとは言えない……けど俺にはもっと明確な理由があるんだよ。】俺

【え？？？】美咲さん

【それはな……美咲さんが俺の心に居続けたからだよ。】俺。（口）で美咲さんの胸に向かつて手で作ったピストルをドキュン……と言いながら打ち抜く仕草を取り入れる。）

【ポツ……高貴……君……】美咲さん

俺に気持ちを打ち抜かれた美咲さんが口口口口と俺の方に来るのを

優しく受け止める。

＊＊この美咲さんを受け止める時はポイントがある。左手を自分の胸の高さに優しく羽毛の様に、右手を自分の腰の高さに硬く筋肉を張り巡らせて…その状態で受け止める事によつて、倒れ際にお姫様抱っこへと持ち込めるのである＊＊

お姫様抱っこにメロリンラブな美咲さんは俺の潤んだ瞳に耐え切れず目を閉じる… そうなつたらもうコンボ完成だ！！！そのまま自分の顔を美咲さんの方へと…

『そ、そうだね。所で美咲さんはゲームとかやつた事あるの！？？』
『んー。イマイチな気もするが、今の俺にはこの発言が限界だった。』

『あんまり自慢になんないけど…結構得意だよBBQとかFLとかやつた事あるしね。』…BBQとは決してばーべQの事ではない。ボスボーアズクエストと言うこいつの時代で人気のRPGだ。FLって言うのはファンダジーロードとか言うコレマタこいつの時代で大人気のRPGだ。

『へ～。なんだ。もしかしてゲーム好きなの！？！？』「これ
は聞いても良い範囲だよな？？」

『うん。私、弟居るから一緒にやつたりするの。女友達どうしやつたりはしないけど、好きだよッ。』……好きだよ……好きだよ……好きだよ……好きだよッ……不覚にもかなりドキッとしてしまった（汗）

。『そつかあ。よかつたあ。いやね、子豚と話しててさ、美咲さんが嫌だつたら出来ないねつて。』

え？？？と不思議そうな顔をしている美咲さんをすばやく感知し、俺はこれから行うゲームの説明をオペレーターから聞いた事になるべく詳しく話してあげた。

『…す』「…。それってって事はゲームのキャラクターになるのは自分自身つて事なの！？』…

『うんうん そゆこと！…面白そうでしょ！？俺と子豚は一回ゲーム内に入つてみたけど幻想的で綺麗な世界だつたよ』

俺は、見たままを美咲さんに話した。鐘の様な電灯や、光道…まだゲームを実際に始めたわけではないからあんまりでしやばつて話せないのだが…

『うああ。いいなあ 本当に楽しみになつてきた。子豚君からはそつゆう事聞いてなくて、RPGを一緒にやらない？？つて言われただけだつたから。あのゲーム機でやるんだから結構凄いんだろうなつて思つてたけど…そんなに凄いだなんて…』

『でしょ 俺もびっくりしたよ。』…初めはガチガチに緊張していたが会話を弾ませるにつれて自然と話せるようになつてくるのが感じられた。

『おまたせえ。じめんじめん。』と遅れて俺達の所に来たのは子豚だつた。子豚は今日、当番らしく放課後に色々と授業のまとめやクラスの状況を先生に報告に行つていたのだ。

3人が揃つたと言つ事で、俺達は子豚の家へと向かつた。

この日もレンガ色の夕日がまぶしく、少々風があり、あの収穫日の
リプレイかと思つた。

『（（お邪魔します　））』と美咲さんと一人で挨拶し、子豚の家
へと上がらせてもらつた。俺と美咲さんは子豚の部屋へと足を進め、
子豚は俺達に出してくれる飲み物を入れにリビングへと向かつた。

『じゃあ、先に準備でもしこか。』

『そうだね。』

俺達が準備をしていると、子豚もジュースを持つて部屋に来た。『
ありがと』を三人が綺麗にそろつて言い、とうとうThe Con
tinuance Of Dreamを開始した。

吸い込まれる様なこの感じが俺は結構好きだつた。何と表現すれば
分かりやすいだろうか…眠つている時にふわっと浮く様に感じる時
がある…それに似た感じだ。

目を開けるとそこはもう別世界なのだから凄く不思議だ。第三者と
してゲームをやつている人を見た事が無いだけに本当に実態が別世
界に飛ばされている様に思える。

俺と子豚にとつては昨日今日で流石にあまり驚かなかつたが、それ
でも『やつぱり綺麗だなあ』とついつい声を漏らしてしまつた。
美咲さんいたつては、小さい子がショーウィンドウ中のおもちゃ
に釘づけになつていてる様に目を丸くし口をボカンとあけて、360

度満遍なく何度も見回していた。

『ほ…本当に綺麗…凄い…この世のものとは思えないね…』…と美咲さんが感動していると『そりやこの世のものじゃないからねへ』っと子豚が余計な事を言い美咲さんのムードをぶち壊した。心なしかちょっと美咲さんがムツとしたような表情をしたことには驚いた…美咲さんも怒つたりするんだ…まあ当たり前か…

俺と子豚が前を行き、それに続くような感じで美咲さんが俺達の後ろに付いてきた。

『よつじゅわーとーえコンチナーンス オー ドリームの世界へ…お待ちしておりました。』…オペレーターだ。俺達が今日来る事が分かっていたかの様な口調だった。

『先日はどうも。』と俺も軽く挨拶した。NPCに向かって何やってるんだ…

『そちらのお嬢さんが最後のメンバーの一人ですね??』…と聞くオペレーターに俺と子豚は『はいっ!』と応えた。

『新しい方も来てくださいましたので説明をもう一度最初から致します。』

…数分後…

『わかりました。おおよその事は高貴君に聞いていたので…』…美咲さんは俺の方を見てニッコリ笑つた。

『それでは、コレより The Continuance Of Dream の貴方達の最初の街【ウエルチ】へ転送いたします。宜しいでしょうか？？』

『ちょっと質問してもいいですか？？』 と聞いたのは美咲さんだった。

『はい。どうぞ。』

『ゲームの世界… The Continuance Of Dream の世界で進む時間はどうなるのですか？？？』 … 『と聞こますと？？？』

『この世界に一日居たら現実世界でも一日過ぎた事になるんですか？？？… ああ。そう言われてみれば確かに気になる点だな… と俺も気になった。』

『このゲームに居る間の時は勿論現実世界でも流れます。しかし、ゲーム内での時の流れと、現実世界での時の流れでは流れるスピードが違います。簡単に言いますと、このこの世界で一時間居たとしても現実世界では精々10秒って所でしょう。』

『やうなんですか』 と美咲さんは少し安心したように胸を押さえて一息ついた。

『しかし、注意してもらいたい事がござります。このこの世界に居る間は当然プレイヤーの皆様も時の流れは感じられます。このこの世界でも24時と言う時間があり、それに基づいて朝・昼・晩・と構成されております。こちらに一年間ずっと居たとしても、現実世界では一日ちょっとしか経つてないことになります。このゲームと

現実世界でのラグタイムが大きくなれば生じるほどに現実世界に戻った時の違和感は大きくなります。ですのであまりに長いプレイはオススメできません。』

『わ…分かりました。』…恐らく美咲さんも子豚も分かつてないだろ？。と思い、俺が正確に状況を把握する必要があった。

『その例えば、ゲームの世界で計10年居た場合。恐らく現実世界では1-1日くらいになるとと思うんですけど。その場合ってのは現実世界に戻った時に10年分の歳を取っていると思っていいですかね？？…美咲さんのした質問は以外に重要な事だと気づき俺だけでもしっかりと理解すべく質問をした。

『それは違います。その場合現実世界にもどっても1-1日しか経つておりません。精々極度の空腹状態になつていてると思います。』

なるほどね…何となくだが理解できた気がした。

『そうですか。わかりました。結構危険なゲームですね。』と俺が言つとオペレーターは苦笑した。混乱する美咲さんと子豚にはあとでちゃんと説明してやるか…

少しオペレーターと会話し、俺達は『転送して下さい』と頼んだ。

『それではお気をつけて、The Continuance Of Dreamの世界を楽しんでください。…デュベル・イン・グリーブ！…』…オペレーターが魔法のような言葉を発すると、俺達の体は足から頭にかけて粉の様にゅっくりと消えだした。

『（（（えーーーー？）））…』…『何ーーーー？これーーーー？どうなつ

てんの！？！？』

消えていく中、子豚は泣き喚き、美咲さんも声がでないほど驚いていた。そんな一人に冷静さを取り戻してもらうために『大丈夫！！大丈夫！！』『レはゲームなんだから！！！』と声をかけ続けた。

寒いわけでもないのにカタカタと口が音を立てて危険信号を送ってきた。

正直、俺も泣き出したいほど怖く、『大丈夫』とかける声は振るえて逆に一人に恐怖感を与えてしまったかもしれない。…そしてとうとう俺達の体全てが消えた。

『… GAME … START … です…』

『リリアの失態』

【暗い… ハハは… ビーだ… ??】

【… ウェルチとか言う街に送られるはずじゃなかつたのか… ??】

【かこの真つ暗な空間がオペレーターが言つてたウェルチとか言う街なのか… ??】

【そういえば、子豚や美咲さんも居ないな… まさか3人で旅をするとか言つていたけど… RPGならではの仲間を探しながら旅をするのか… ??】

【要するに… 最初は一人… ??】

気がつくと俺の足は地に付いておらず、フワフワとビームの空間を彷徨つてているようにも思えた。

何も見えない中頭がボーッとし、なにやら変な声が聞こえてきた…

【ん… ?… 子供… か… ??】

ゲームだからと言つてあまりなめてかからない方がいいよ…

ゲームの世界と言つのはゲームの世界での現実… つまりその世界に入り込んだ君にとつてはもう一つの現実世界なんだから…

ビックバンと言つ宇宙規模の大爆発によつて作られた地球と言つ名の星… 神によつて生み出された人間…

プログラムによつて生成された、The Continuance Of Dreamという世界、プログラマーによつて生み出されたゲームの人々… ゲームの人々にとつては僕達からみた只の人間は… 神同然。創造者なのだから…

僕はとんでもない事に気がついてしまつたの… かもしだいんだ…

君達が何気なく過している日常…

そこには色々な疑問点があるんだ…

思っていても中々行動に移せない事。例えばダイエットなどをしようとして、今日から毎日走るぞ！！！と思い硬く決意するが3日と続かないように…

その逆で、そんな事思つてもいなしに気持ちとは反対の行動をとつてしまつ事。気持ちではムカつくと思つてもその場は空氣や状況、今後の付き合いを想定し、笑つて過ごしてしまつように…君にも僕が言いたい事が分かるだろ？？？

この現実世界には君達にとつての現実と言う世界がある…さつきも言つたように当然ゲームの世界にはゲームの中の人達にとつての現実世界が存在する…

僕達はゲームをする時にそれを操つて遊んだりしている…僕達がゲームを止め、操る事をやめたらゲームの世界の人たちは自由になる…これつて僕達にとつても言えることなのではないかな？？？…思いもよらぬ行動…決意したのに中々行動に移せない…その自分の意思で動く事の出来ない時は僕が思うに操られている時間だと思うんだ…俺達がゲームなどでそのキャラクターを操作するように、俺達自身も操作されているのかもしれないんだよ…

君は何故こんな未来に来ているんだい？？？…君の意思？？…違うだろ？？？…恐らく君を操作する何者かがバグを発生させたか、何かやらかした…

僕の思考だとそうなる…反論できないだろ？？？…何故かを説明できなからね…

全てはループしてるんだよ…僕達がゲーム機という物を利用し操る人々の世界。恐らくそのゲームの中にも僕達には分からぬ手段を用いて誰かを操つていると思うんだ…さらにその先もずっと…何十…何百…何千…と言つそれぞれの世界が綺麗に輪になるように…操りあつていると僕は思うんだ…とてつもなく大きな輪となつてね…そ…そ…それ…それじゃ…君がそのゲームに入った事で君を操作する事になつた…オペミニ…とでも言つておこうかな…

アハハハ…変な事言つちゃつて混乱させちゃつたかな…コレは悪魔

でも僕の思考だから深く考へないで……じゃあ宜しくね……

『う、ああああ、……』

『大丈夫です！？！？高貴君……しつかりしてくださ……』……子

豚……？？

『高貴君……私だよ……分かる？？？美咲だよ……いきなりビリしだの？？？』……美咲さん……

『あ……あれ……ココは？？？』

『ゲームの中だと思いますよ。』

『でも変だよ、街に送つてもうえははずだつたのに何処にも街何て無いし。』

周りは大草原だつた。……360度何処をビリみても地平線……さつきの暗い場所はいつたい……それとあの子供は……何を言つていたんだ……？？？

『そんな事より、大丈夫？？僕と美咲さんが気がついたら高貴君、白目むいて凄いなされてるんですけどもん……焦りませたよ……』

『うんうん……本当にびっくりしたよ……』

『ごめん……その……あれはじゃあ……夢だつたのか……』

聞こえてきた声があまりにリアルで俺にはとてもあれが夢だとは思えなかつた。

ゲームの仕様で3人のうち誰か一人にああゆう悪趣味なイベントがあるのか？？？と……一番自分自身の納得できる理由を付けて早いとこ忘れよう思つた。

【それにして……凄いなされていたんだな……】……手は汗と砂でべつたりとしていた。

「人に「ちょっと変な夢を見ていた」と告げ、心拍数が正常に戻るまで少し座つて休ませて貰う事にした。

『無事…到着されたようですね。』…『（え…………）（）』…突然の声に3人とも周りを見回した。…が見えるのは爽快に空を走る鳥達だけだった。

声の出元に一番最初に気がついたのは美咲さんだった。

『声…こ…これからじゃない？？？』…と美咲さんの視線は俺の腕に付いているリングだった。

『な…なんじやこりやああ…！…！？』…決してボケたわけではない。俺は石原裕次郎の真似などしていない。とまあ例えボケたとしてもこの一人にこのネタが通じるはずもない…それに今はボケられる状況ではない。

『高貴君、こんな着けてましたつけ？？？』…子豚が不思議そうに頭をかしげた。

『着けてねえよ…こんなもん…！…』

『皆さん、驚かせて申し訳ありません。私はミリアです。貴方達のオペレーターの…』…そう言われてみると聞き覚えのある声だった。

どうやら彼女が説明し忘れたようで、プレイヤーの案内役として担当のオペレーターとの通信機であるリーディングリングと言うリングを3人のうちの誰かにつけるはずだったらしい…そうゆう大切な事を忘れるなよ…

『転送中に高貴さんにお付けしたので、高貴さんだけ変な空間へと飛ばされ…悪夢を見る形に…すいません…』…お前の仕業だったのか…絶対に許さん…

『それでは要点を言います。私は貴方達がゲームをリタイア、もしくはクリアするまで一緒に旅をする事になつております。要は貴方達の最後を見届ける役と言つわけです。』

『このリングで僕達の行動を把握するの？？』

『やうと言えはうですし、違つと言えは違います。』…//リアは謎めいた事を言つ出した。

『どうゆうとです？？』…すかさず美咲さんが聞くと//リアは『私は本来貴方達と共に行動するはずなのです、しかしそれはブレイヤーの方の判断に委ねられております。貴方達が私に出てきてほしくない。お前はリングに入つて見学している…と鬼の様な事をおっしゃつた場合にこのリングに封印され、このリングとして一緒に旅をする事になつております。しかし、貴方達が当然の様にリングから出てきて一緒に旅をしよう…と言つてくれれば私は貴方達と共に旅をする事ができるのです。』

はあ…なんとまあしゃあしゃあと…お前の話方だと俺達が出してやらねば鬼扱い、出すのが当然。早く出しなさい。と言つていいように聞こえてならん。

『やうなんですか…』

『で、出してくれます？？』…実際に見なくとも彼女が上目使いで最大限に可愛さをアピールしているのははつきりと分かった。勿論俺の応えは決まつていた。

『だーめだー…!!…』・『是非…!!…』

何と…見事に俺一人の意見と美咲さんと子豚の一人の意見が真

つ一つに割れたでは無いか……」の場合完全に浮いているのは俺である。

二人から……氷の様に冷たい目が俺に向けられ、……さらに、本来感じるはずの無いリングの中からはもつと恐ろしい視線が……今にも視殺されそうな勢いだった。

『前言撤回いたします。』……と言わざるを得ない状況だった。

チャリツ……と囁きの音をだし、リングは割れ地面に落ちた。

黒と紫のいかにも怪しい煙がモワモワと渦を巻いてリングから湧き出来てた。

『それでは……改めまして。ミコアと申します 宜しくね……』

俺はてっきり、最初のオペレーター案内室で見たあの女性が出でてくるのかと思った。……子豚たちの表情から見ても二人とも俺と同じ気持ちを抱いているだらうに違いない。……な……何だこいつは……って言うか、誰だお前……まさにコレだ。

声はさつきとなんら変わりなかつたが、姿かたちがまるで違つた。背丈は30～40センチくらい……顔や服装は女性だったが、背中からは背丈程の白と黒の羽が生えており、空を飛んでいた。

そう、ゲームや漫画に出てくる小悪魔みたいななりをしていた……耳がネコ耳なのは少々俺を萌えさせた。すまん、忘れてくれ。

男からだけでなく女から見ても超キュートな姿で登場し、俺達に自己紹介をしだした。

『本名はナチャ・ミリア。デーモン種の年齢19歳。性別は女性。血液型はB-3A型。』……19歳！？！？俺より年上かよ……B-3Aって何だよ……それにデーモン種ってやつぱりお前悪魔じゃねーか。

…『 短い付き合いになるか、長い付き合いになるかは貴方達次第です

』

『 //コアさん、私より年上なんだ』 『 おひるね宜しくね

』

宜しくね つて美咲さん…俺は今すぐ付き合いを終わらせていただきたい。わあ、良い子だからリングへとお戻り。

俺の考えを見透かしたかのように//コアの方に来て耳打ちした。

『 てめえの考へてる事は分かつてんだよ！…調子こいてるとくつちまつぞ餓鬼が！…』 『 す…すいません。生まれて初めて失禁シックキンしてしまつかとおもつた。』

『 あたしが一番年上だけど、あんまり気にしなくて良いよ それと//コアって呼んで皆で楽しい旅にしようねッ』 『 なんだこいつ… そりあの口調とまるで違う…

『 (((はあこ))) …子豚と美咲さんは嬉しそうに返事をした。

//コアは返事をしていない俺に『 楽しい旅にしようね、！…』 とネコを怒らせた様な目つきで俺をみて応答を待っていた…『 ウイ

…』 俺には選択の余地が無かつた…

結局俺は不本意的にオペレーターの//コアと一緒に旅をする事になつたのだった。

『 それではあああ、始まりの街【 ウェルチ】へ向かつてええええ
いや出発…！…』

『 ((おお)) …』 『 おう…』

『First city ウェルチ』

俺はＴＶゲームでＲＰＧをやる時は街に着くたびに即宿屋で休憩してやううと思つた。たとえ、ＨＰが満タンでＭＰが満タンであつても…

『僕…もおクタクタです…本当に動けません。』

『俺も…マジで疲れた…』

『私も少し休憩させて欲しいです…』

日が照りつけ、天然サウナの草原を歩く事…約2時間…無事に…いや、コレは決して無事ではないな…瀕死の状態で始まりの街【ウェルチ】へ着いた。

最初の街に行くのに瀕死状態つて…おかしいでしょ…え！？魔物に襲われたのかつて？？？ツチツチツチ！ノンノン。

2時間も無防備な状態で時には歌を歌つたりしながら歩いてきたのだが、魔物には出くわさなかつたのだ。俺達が瀕死状態になつてゐるのには他の理由があるのだ。完全なる体力不足だ（爆）

『全く…あんた達なつさけないねえ…私より若いんだからこんな事でへばつてんじゃないの！…』俺達のが若いつて言つてもそんなにかわんねえだろ…

『特に…！…、高貴と新輔。あんたら男だろ？！？美咲はともかく…ホントに情けない…』…これ以上体力を消費したくなかったのか、はたまた図星だからなのか、俺も子豚も全く言い返すことは無かつた。

『はあ…まあ良いわ。とりあえず宿屋に言つて休憩しましょう。次

の街まではウェルチまでに来る距離はあるからね。少しの間ここで体力作りだわね。』

『はい…』『はい』『つい』

俺達はウェルチの宿屋、【マル】で休憩することになった。…と言つても音楽が流れたら一日経つているなんて事はない。

ミリアが言つには宿屋に泊まって直ぐに朝になると言つ現象は、次の日の朝が来るまでキャラクターはプレイヤーから開放され、自由の時間になるそうだ。…今の俺達にプレイヤーなんているのか？？？ そう言えば…悪夢の時、僕が君のプレイヤーとなる…とか誰かが言つてた気がしたな…でもあれはミリアのミスで起こったバグだしな…まあ良いか。

『さて そろそろ休憩終わって、このゲームの説明に入ろうかしら』…休憩終了ってまだ30分も経つてないんですけど…

『説明つて口に来る前に色々聞きましたけど？？』…子豚の言つ通り！…俺と子豚はその説明とやらを2回も聞いたのだ。

『うむ。このゲームのルールくらいは大体あなたに教えてもらつて理解しておつもりだが？？』

『フンッ。あんた達に教えたのは基礎中の基礎。言わばゲームのコントローラーの持ち方にすぎないのよ。私がこれから教えるのはこの世界での仕様よ。』

『ふうん。』…

『それじゃあ一度しか言わないからしつかり聞いてね…！』…何かこんなガキみたいな姿のやつに偉そうにされると腹が立つな…俺が未熟なのか…

『 まづね…』 ニニアは以外にも分かりやすく説明してくれた。 …

様はRPGの基本であるステータスに関係する事だ。ステータスと言つのは能力みたいなもんだ。

The Continuance of Dreamの世界では「^{ベル}」と言うキャラクターのランク見たいなのはないらしい。 : LvUPの際には体が光つたりするのかな と密かにドキドキしていた俺の夢は消えたと言うわけだ。

じゃあどうやつて強くなつていいくか…超簡単に説明すると行く街ごとにランクUPすると思つてくれれば良い。

例えば、大草原 ウエルチと俺達は無事に一つ目の町に着いたわけだ。その間歩いた体力は己の基礎体力に影響され、プレイヤー自身の体が鍛えられると言うわけだ。…要するにゲームを終了し、現実に戻つたら子豚が瘦せているかもしれないというわけ。

その基礎体力とは別に街ボーナスという物が存在するらしい、各街にはスキルSHOPという店が存在している。 そのスキルSHOPで能力UPをするというわけだ。

体力(HP)、精神(MP)、攻撃(AT)、防御(DE)、回避(SP)、…とまあ大体10種類くらいの分野がある。スキルSHOPには測定機があいてあり、各々の能力が今どれくらいなのかを測定できるという。

そして定番といつちや定番だが、この世界にも職業が存在している、それは最初にたどり着いた街、俺達の場合は【ウエルチ】で登録をしないと勝手に決められてしまうらしい。

『 それじゃあ、とりあえず皆にやつてみたい職業を聞くからこの中

から選んでね』『ミコアはジョブ表みたいなものを出し俺たちに見せてきた。

『それじゃあ、お互いがお互いに気を使わないようこ、皆せえので一斉に言つましょ!』…と子豚が張り切り皆一斉に言つ事になつた。

『せえの…』

『魔法使い』『魔法使い』『聖職者』

『…』

そり、俺達の中には前衛職が居ない…そりや そうなるわな…ゲームのキャラクターならともかく、自分が盾になるなんて断固拒否だ。…美咲さんの盾になら…くらでも… つと思つたり思わなかつたり。ここで話を説明に戻そ。それぞれの職業にあう能力をドンドン上げていくとスキルSHOPの店員からスキル（魔法や特技）を覚える本がもらえるらし。

まあその本を読んで覚える…なんてメンドクサイ事は無くその本を担当オペレータに渡し、オペレータがスキルを習得する呪文のよふなものを唱えると、その後から使えるようになると言つわけだ。俺の手から炎がでるのも時間の問題だな

RPGで欠かせないのが敵だ。^{モンスター}俺の考えでは街に向かうために敵を倒しながら行くものだと思っていたが、まるで違つていた。そもそもモンスターなどとはめつたに遭遇しないらしい。…じゃあ単純に最後の街をめざしてひたすら進めば良いのか??…それも違つていた。

俺達の敵と言うのは他プレイヤーチーム、NPCチームの事らしい。

…街に向かう途中に発見した相手と戦わなければならないと言つ。お互いが望む望まない関係なく、各自に着いているオペレーターが発見し次第、即戦闘となる。

そして、敗者は前回の街に戻されると言つわけだ。…何だかスゴロクのようなゲームに思えてきた。…このゲーム…楽しいのか？？それをいつちやいかんな。

『とまあ、今田はここいら辺にしどくよ！…』

『え！？戦闘つてどうやってするかとか、呪文を覚えた時にどう使うかとかまだ知りたい事が山ほどあるんだけど…』

『まあ…あんたはこの一人に比べて賢いようだし、まだまだ覚えるかもしないけどね、美咲と新輔はもう限界みたいだよ。』…ミリアに言われ一人を見ると、正に昔の名曲の歌詞にもあつた【思考回路はショート寸前】って感じだった。

『あ…そつか。なら仕方ないな。』

『（（ごめん…））』と子豚と美咲さんに謝られ、何だか一人に悪い気がした。

『まつ、チームワークつて言つのはすつごい大切だからさ 今のうちから相手のために我慢する事には慣れといったほうが良いよ』とミリアは楽しそうに笑っていた。

話もひと段落ついたということで、俺達は『ソロソロ終了』して現実に戻るよ』とミリアに告げた。

『え？？…』とミリアは世界が滅んでしまったかの様に…と言つても分かりにくいな、恋人に振られた時の様に青ざめて、さつきまで楽しそうな雰囲気が一転した。

『えつてなあ。俺達だつて明日は学校あるんだし、ソロソロ戻らないと…』

『私もソロソロ家に戻らないと…テスト勉強もあるし…』

『また暇な時に来ますから』 つと子豚は笑つて言つたが、この言葉

ミニリアは涙を流した。

『おッおい！ いきなりどうしたんだ？？』

『ミニリアちゃん…大丈夫？？？』

『え？？？ぼ…僕のせいですか？？？ミニリアさんすみません！…』

と流石に皆心配した。…あのミニリアが涙を流したのだから。

当然の事だが、ミニリアは俺達の世界には来れない。俺達が再び来るまでミニリアはウェルチ（最後に別れた場所）で待つてゐるとの事だ。俺達がいつ来るかも分からないのに…

彼女が待つてゐる期間といつのは、俺達が再びゲームを再開するまで、もしくはゲームをやめると宣言するまで…の一通りしかない。まあ当然の事だが、ゲームをやめると宣言せずに永遠に来ないプレイヤーも居ると思う。…むしろそっちの方が多いかもしれない。そんな感じで、永遠に待たされる事となつたオペレーターは、ある期間が来るとゲーム内で自然と消滅し、消えてしまうらしいのだ。流石の俺もミニリアからこの話を聞いた時は同情を抱いた。

『じめん…オペレータの私がこんなんじゃだめだよね…』 つと最後に俺達に謝罪し、俺達の意見も聞かずに帰還の魔法を唱えた。『インペリアル・リバース…』

『うん…オペレータの私がこんなんじゃだめだよね…』 つと最後に返す言葉が見つからなかつた。

『おッおーーーまでって…また直ぐ来るから、待つてみひよーーー』
…
つと俺らしからぬ後で振り返ると恥ずかしくなつてしまつた言葉をかけ俺達は//コアの前から消えた。

俺の言葉がギリギリ聞こえたらしく//コアは本当に嬉しそうに笑つた。
『ありが…』

気がついたら子豚の部屋にいた。

『First city ウェルチ』（後書き）

御閲覧本当にありがとうございます。

今週は先週に比べて閲覧者が増え、私は感動しております。
大変、身勝手な事なのですが土日は小説を書くことが出来ず更新も
出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非
お聞かせください。

最近は寒くなつてきましたので風邪などには十分注意してください。
今後も一生懸命頑張りますので応援宜しくお願ひ致します。

追伸：明日（2008年12月6日）で22歳となります 一人バ
ースデイ ヤツホイ：

『センチメンタル』

ゲームの世界から現実世界へ戻ってきてから1時間くらいは凄い脱力感に襲われ、3人とも無言で子豚のベットにもたれかかっていた。

俺、個人の意見を言うと『またやりたいな…』とは正直思わなかつた。…恐らく俺以外の二人も同じ意見ではないのかな…

ため息だけの沈黙がずっと続いていた中最初に声を発したのは子豚だつた『そ…それにしても疲れましたね…』。

『何だか…フルマラソンを完走した気分ですよ…』…つてお前はフルマラソンビコロか10キロマラソンすら完走した事が無いだろう…

『私も…正直ゲームが終わつた後にこんなに疲れるなんて思つてなかつたな。』…女の美咲さんや、デブつてる子豚は俺以上に疲れただろうな…

『そうつすね…』

『あの…次ぎやるのがんまり気が進まないのは僕だけでしょうか…??』…子豚の意見に俺も美咲さんも何にも応えなかつた。

ゲームを出る時はミリアに『また、直ぐに戻るから』つと言つた。正直その時は美咲さんや子豚さえよければ明日にでも来る気で居た。…が予想外もしないゲームの副作用が俺たちを襲つたのだ。…ゲームに慣れてない子が長時間ゲームをして頭痛が少々…つて言つみたいに俺たちの慣れの問題だと思われる。

子豚への返事を俺が考へていると美咲さんが『私も…少しの間はや

らないかも…』と、とつとう本音を語りだした。

美咲さんに便乗するように子豚も、『だよねえ…こんなに疲れるなんて…』と子豚と美咲さんでゲームの欠点を言いまくった。

俺はと言つと、無言に一人の愚痴を聞き入つていた。…子豚や美咲さんの言つ事も十分分かる…が俺はミリアとした約束が気になつていた。

ゲーム上のミリアの事に対しても考へてゐる俺がおかしいのかも知れないが、正直一人が無責任に感じてならなかつた。

…結局この日はテスト勉強をせず、解散した。

『ただいま…』

『おう…お帰り！今日も遅かつたな？？友達の家にでも行つてたのか？？』

『ああ、うん。』

『もう直ぐテストだら？？俺より賢いお前に勉強しろつて言つのは何だか不思議な気分だが…少しくらい勉強しつけよ…』…『へえいへい。』

受験日…

子豚の家から帰宅し俺は隆一さんにエルピネス学院に合格したと言う事を報告した。…正直このときは隆一さんにはめられ、かなりレベルの低い高校を受験させられたのだと思つた。

『隆一さん……遅くなつてすいません……友達の家に行つてつて……』

『ハハハハ 僕も受験に失敗した日は一緒に落ちた連中と白葉酒ヤケザケで盛り上がつたもんだよ……今は警官だし、未成年のお前に飲酒をしても良いとは言えんがまあ、今日くらいは仕方ないな。あんなにレベルの高い高校じゃなくても俺はお前に普通の高校に行つてもらつて、大切な友達を作つてもらつて……楽しく生活してくれればそれで良いんだ。あんまり落ちた事をきにするな……なツ……なツ……』

隆一さんは俺が帰るまでも間に俺を励ますスピーチでも考えてたかのようにダラダラと俺の合否も聞かずいきなり話し出した。

『あ……あの……俺……受かつたんつすよ……』

『うんうん。そななお前の口から聞かなくてもわかつてゐるよ、当たつて砕けろつて言つてたろ……だからあんまり気にするなつて……』
…と全然俺の言葉が耳に入つてない様子…

『だあかあらあ……ヒルピネス学院に合格したんですつて……!』

『……高貴……俺は、お前が落ちても怒つたりしないぞ……でもな……嘘だけは辞めてくれ。俺に言ひづらにかも知れんが、正直に言つてくれよ……俺はお前の兄貴みたなもんなんだからさ……俺には何でも話せるようになつてくれよ……』
…そ、そんな悲しそうに言われても…俺マジで受かつたんだけどな…

『隆一さん……本当の事を言つんで信じてくださいよ……』

『おつ……絶対に本当の事を言えよ……』
…はあ……不合格しました。…

…の方が信じられるつて…俺つてそんなに頭悪そうかな…??

『合格しました。』

…

『合格です。』

『…』

『…』

『…』

『…』

『隆一さん…？』

『ほ…本…嘘…じゃないよな…！？』

『ええ…！…』俺は女にすらした事のないウインクを男に対してしてしまった。パチッ！！

俺の報告を受けたあの隆一さんは完全に壊れていた。

もう深夜だと言うのに…近所の人、会社の人、知り合い全てにT-E

「、メールで俺の合格を報告しまくったのだ。

翌日も隆一さんは会社ではしゃいでいたらしく、隆一さんの上司に
こいつ酷く叱られたそうだ。。。叱られてもなお、『良かっただ良か
つた。本当に良かった。』とはしゃいでいた。

隆一さんが俺を大切に思つてくれているのが本当に実感できた。
そして俺自身、隆一さんの事が大好きだと言つ事も実感できた。

【なつつかしいな…すつかり俺もこっちの世界に馴染んじまつた
な】

義兄弟一人であんなに盛り上がったあの日からもう結構経つた。
今ではあんなに高い受験費を出してもらってまで行く価値のある高校
だつたのだろうか…と疑問に感じる時が多くある。

学校には毎日休む事無く通つていて…しかし、俺がまともに参加
している授業といったらチーム授業という、5人1組でやらなくて
はいけない授業だけだ…それ以外は大抵寝て過している。

『ねえ……隆一さん……』……考え方をしても始まらないと思い隆一さんに相談する事にした。

『ん？？』……隆一さんは家での仕事を中断し、俺の方に来てくれた。

『高い金出してもうつて受験させてもらつたのに、こんな事言つのは非常識だと思つんだけど……あの学校つて本当に行く意味あるのかな？？』……俺は隆一さんの顔が見れず、俯きながら話した。

『……どうかしたのか？？……連れが出来ないとか、勉強がつまらないとか……』……口調的に、怒っている様にも、心配している様にも感じられた。俺は俯いたまま後者だと応えた。

『……勉強なんて物は楽しい物じゃないぞ？？……高校変えても、社会にでても、勉強という物は付きまとつてくる。それに共通して言える事は勉強なんて殆どが楽しい物じゃない……』……隆一さんは弟である俺に社会の先輩として教えてくれている様にも話したが、俺の言いたい事とは少々的外れの返答だった。

『うん。それは分かつてるんだけどさ。授業でやつてる内容が……その……どれも単純な事ばっかりと言つか……わかつてる事ばっかりといふか……』……あんな授業は俺の時代の小学生でもできる………と言いつたかつたが、俺は語尾を濁らせるだけだった。

隆一さんは少し考え込んで、『……じゃあ辞めて働くか？？？』と厳しい口調で言つた。

『え！？』……予想外にしない返答に俺は伏せていた顔をあげて隆一さんを見た。……正直辞めたいなんて思つてもいなかつただけに、驚かされた。

『だつてお前、行つても仕方ないって思つてるんだろ？！？……』……と顔を上げた俺を覗き込むように見つめてきた。

『いや……何のために行っているのかなって……思つただけ。辞めたいとかは思つてないし、明日からもちゃんと学校行くよ。……変な事聞いてごめん。』……いやはや全くだ。我ながら何を聞いてどんな返答を期待していたのだろう……俺は部屋に戻ろうと立ち上がった。

『おい。高貴一ちゃんを待て。お前、あの学校に何を学びに行つてるのか分からないうつて言つたよな。……お前があの学校を選んだ理由を考えてみる。……魔法だろ！？』……魔法ねえ……

俺は初めて隆一さんを無視したように部屋に戻つた。……隆一さんに悪い事したなと、部屋についてから後悔した。

隆一さんが言つたとおり俺はエルピネス学院に【魔法の授業】があると言う理由だけで決めた。今思つと、何故もつと冷静に考えなかつたのだろうと、自分の愚かさを考えさせられた。

俺は今日ゲームの世界でミリアに色々と話を聞いた。呪文の覚え方とかの話を聞いてゲームだなと感じた。子豚の家から帰る途中に、ふと現実世界での魔法はどうやうものだらう……と考えた。

考へ出して直ぐは色々な魔法の事を考へていた。火の魔法、風の魔法、闇の魔法……それらを考へているうちに、一つの疑問が浮かび上がつた。

そう、俺はこの世界に来てまだ一度も魔法というものを見た事が無いのだ。じつちの世界に来てソロソロ3ヶ月が経とうとしていたのにだ。

さらに言つとエルピネス学院ですら魔法を使つている人を見た事がない……。

Why……おかしくないか？？

街で見かけないのは魔法を公で使う行為がダメだからかもしない

… で納得した。

その後に、なら学校では？？？… と思い、俺は最低最悪のパートンを思いついてしまった。

そもそも、俺の考えている魔法の勉強と学校側の魔法の勉強が全然違つ物だったかもしない… という事だ。

俺は勝手に魔法の勉強とは魔法が使えるよつになる… と解釈していた。

実際は、魔法… は… 事なのですよ。と単純に本で魔法について学ぶものかもしない… と悟ってしまったのだ。

『… ま、まさか… へへッ』 俺は自分の部屋の窓から羽樹の木へと飛び移り星を数えながら色々考えた。… というより珍しくセンチメンタルになっていた。

結局俺は羽樹の木で眠ってしまったかららしい。…真冬に外で寝たのに寒くないのだから時代の変化は素晴らしい。

俺は学校に着くなり職員室へと向かった。…職員室に入るのは受験日以来の2回目だ。クラスの当番になれば入る用事もあるのだが、もう2ヶ月以上経っているのに俺はまだ当番になっていない。
…受験日を振り返り俺はある美しい先生と会えるのでは…と少々期待に胸膨らませていた。

『おはよッ』…と職員室に向かう途中に声を掛けられた。

俺はとっさに振り向いて『あ、おはよー!』と丁寧に挨拶した。

な…俺に挨拶をしてくれたのはウル覚えの想像以上に美しかったあの時の先生だった。

…流石に以前より服装の慣れで下半身の暴走は免れたがやつぱり綺麗だ。いつみても美しいとは彼女のために出来た言葉なかもしれないな。

『山岡君?…だつたよね?…受験満点の…』…山岡君!?
…ハイツ!…山岡です。覚えていてくれたんですね…僕は今非常に感動しております。

『もしもおおし。大丈夫!…、具合でも悪いの?…ハツ。また悪い癖が出てしまった。妄想の世界ではしっかりと受け答えをしていたのだが、そうなると現実での受け答えをすっかり忘れてしまつ。

『あ、いえ、質問がありまして、職員室に向かつていた所です。』

『こんなに早朝から何か用でも？？』

『その前に…先生つて今おいくつですか？？』…つて俺は何聞いてんだ…恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ。

『え！？、私？？今23だけど…もしかして…そんな事を聞きに来たの？？』…ととと、とんでもない、そんな失礼な事を聞くために来たわけではないっす。…でも、聞いて損はしてないかも…聞かぬは一生の恥つていいますしね 23歳ですか。大学卒業したばっかりじゃないですか…。つてボケエッ”…!!

『いえ、若いんだろうなあって思つたので聞いただけです。えっと僕の用件は、2年生からの選択教科で学ぶ予定の魔学について質問したいんですけど。…』…いつちゃ悪いが…こんな新人先生で分かるのかな…ルックスは200点満点だけど…

『ああ。魔学の事が知りたいの？？貴方まだ1年生でしょ？？』
『はい…その…ちょっと気になつた事がありまして…このままでは夜も眠れぬ日々が続くと言いますか…ダメッすかね？？』

『アハハッ。まあ本当はいけないんだけど、夜も眠れないんじゃ仕方ないね…えゝあゝ専門教科【魔学】の担当、樹里・宇野です。』
…『ほえ！？』…思わず変な声を出してしまつた。…樹里さんって言つんだ…

『まあ一年生の君が知らないのも無理ないね。私は専門教科【魔学】の担当なの 宜しくね』…ズキュン…つと正に昭和的ボーズ…いや平成だつたかな？？。チヨキの人差し指と中指をくつつけた形の手を頭にあて、『宜しく』と同時に20センチほど前にだした。
…そんな事はどうでも良い、樹里さん、いやいや、樹里先生は

【魔学】の担当の先生だった。

『ああ……そうなんですか、えっと単刀直入に聞きます。魔学って言うのは、魔法についての勉強なのか、それとも魔法を使えるようになるための勉強なのかを教えてください。』……この応え次第で俺はこの学校を去るうと思つ。

その時は……むらば子豚……そして美咲さん。 FOREVER……

『んー……』……そんなに考え込む質問ツすか？？？それともただ俺を焦らしてただけ？？？樹里先生は綺麗な顎アゴに人差し指を当てて考えていた。

『んー。 そうだねえ。 両方ともかな。』……りょ、 両方！？

『つと言こますと？？？』

『さつき山岡君が例として【魔法についての勉強】と【魔法使えるようになるための勉強】って一つ上げたけど、私の授業では両方ともやるかな。簡単にはいつと筆記と実技かな……当然だけど、魔法って言つものは呪文スペルを唱えるだけで実行につつせるわけじゃないのね。まず、その魔法の本質を理解し、その上で呪文を唱えないと呪文が完璧に唱えられたとしても、魔法は発動しないのよ。分かるかな？？』

『はい。 非常に分かりやすいです。』……とりあえず魔法とやらは勉強次第で使われるようになる事が分かり、ほつと一安心した。

『だから、まず本質の理解のために筆記勉強。 それと同時進行で実技の勉強。 つて感じかな。』

『なるほどお……』……俺は樹里先生の言つた事を一言一句逃さず頭に叩き込んだ。

『でもね…必死に努力して本質も呪文も理解しても魔法が使えないケースがあるのよ…いいえ、使えないケースの方が多いと言つた方が正しいかしらね。』

『え…？？』…な、なんだそれ、必死こいて勉強しても、使えない可能性のが高いのかよ…

『魔法を使う上で勉強をする事も大切だけど、一番重要なのはやっぱり個々の性質なのよ。…それで魔法を沢山使える子も居れば、人一倍勉強したのに魔法を一つも使えない子も居るの…』…恐らく今の先生の教え子にも頑張つているのに使えない子が居るのだろう…樹里先生はその生徒を思い出すように空を見上げ、若干悲しそうな表情をしていた。

『そうなんですか…』…俺は…使えるのかな。…そもそもこの時代の人間でない以上使えない可能性の方が非常に高い…

俺の時代から500年もたつたこの時代でも使えない奴が居るくらいだ。

人間が魔法を使えるように500年と言つ長く年月をかけて日々に進化してきたのを俺はすつ飛ばして…タイムスリップと言つ怪奇現象によつて来たのだ。個人の性質なんてあるはずもない…

『まつ。山岡君ならきっと魔学の授業も完璧でしょうね 期待してるから専攻してね…それじゃあソロソロ、朝の会議があるから失礼しますね…』…と樹里先生は職員室へと小走りで駆けて行つた。

この学校を選択した理由である魔法を使えるようになるための勉強…コレ事態は的外れではなかつた。俺が心配し考えていただけ無駄

だつたと言つわけだ。

職員室に背を向け、俺は自分の教室に足を進めていた。…あ、樹里先生に簡単な魔法、見せてもらえば良かつたな…

教室に着くと既に何人かの生徒が来ていた。…

【やあ…皆おはよう…】…なんて挨拶は俺はしない。と言つよ
りいつもは遅刻、ギリギリで挨拶をしている余裕など無いだけだが…
俺はいつも通りまっすぐに自分の席に向かつた。

『山岡君おはよう…！今日は早いね。…挨拶をされただけなのに
【ドキッ】つとした。

俺も足を止め、振り返つた。…もつこのクラスにも大分居るという
のに声と名前と顔が一致しない…俺つてよっぽどクラスに打ち解け
てねえんだな…

俺に声をかけてくれたのは恐らく…山下さんか、木下さんか、上田
さんだ。…俺も過去の記憶を掘り返して3人まで絞る事が出来た。
…まあ上出来だな。

『ああ、おはよう…！今日、職員しつに用事があつて、それで早め
にきたんよ。木下さんはいつもこんなに早いの？！…とつさに
木下と言つてしまつたが、あつているのか…

『ううん。いつもは山岡君のほんの少し前だよ。あたしも遅刻、ギリ
ギリだからさ。』…ちみが遅刻ギリギリなら、ちみより遅い俺は完
全に遅刻ではないか…

『へえ、そなんだ。俺が来た時には皆居るし…居ない奴は休みの
子くらいだしね。ハハハ。…今日は何で早く来たの…？』

『昨日、彼氏の家に泊まつてたから、おばさん達が起きたる前に家を
出てきたの。』…セヨカ。

『ほつほつ。朝帰り登校というわけですね。木下さん、まだ16歳なのにやりますな。』 ……って俺は親父か。

『そ、そんな、変な事してたわけじゃないもん！！テスト近いから一緒に勉強してたの！…』 ……と、木下さんは少し頬を赤めて恥ずかしがりながら俺の発言を否定した。

流石にこれ以上からむと、猥亵物陳列罪（ワイセツブツチンレツザイ）…いや、陳列したわけではないし、この場合は公然猥亵罪（カゼンワイセツザイ）かもしだんな。…6ヶ月以下の懲役若しくは30万円以下の罰金に処せられてしまうではないか…。母性本能ならず、親父本能がくすぐられたが、木下さんへの質問はとりあえず中断し、夜の出来事は俺の妄想だけにおさえた。

少し木下さんとできる範囲で世間話をしても居ると、廊下に美咲さんの姿が見えた。…ムムム。

『木下さん…ちょっと失礼。』 …『え…？…つ、うん。』 …木下さんとの話を中断し、俺は美咲さんのもとへと向かった。…明らかに様子が変わったからだ。

廊下に出てくると、それはもう確信犯だつた。…隣のクラスかその又隣のクラスか知らんが、俺たちのクラスの生徒ではない腐れ外道が、事も有ろうに美咲さんにちょっかいを出していた。

【クオラアアア…！…糞ガキヤー…！…美咲さんに何してくれとんじや…！…！…】…何て言えたらカッコいいだらうな。…当然俺はそんな事は思いはしても言う事はできない。

『あッ。美咲さんじやん…！…どうしたの！？、知り合いで？？…まあ、あたかも偶然通りすがつたように…これが今俺にできる最良の言葉だ。

『高貴君……全然、知り合いじゃないよ……教室に入らうとしたら、いきなり……』……はあ……やつぱり。俺の時代ですら学校で女子生徒にちょっかいだす奴なんて無かつたのに……全く……

『い、いきなりはねえだろ！？、人聞きがわりいな。』……腐れ外道よ、お前が人聞きなど気にするんじゃない……そんな事を気にするのならこんなパブリックでのナンパは控えよ。

『ほうほう、と訛つ訳で美咲さんは嫌がつてゐるみたいだし、君もソロソロ教室に戻つてはどうかね？？』……フン。冷静に言つてやつたぜ。

『あ？ 大体、何だてめえ。てめえには関係ねえだろ。お前が教室に戻れ。』

『んー。関係無い事ないんだけど……美咲さんは俺の、か……親友だしな。』……いつかきっと、美咲さんを彼女と呼べる日が来ます様に。

『ハハハ。何だお前ただの親友かよ。彼氏でもねえくせにしゃつしやつてくんじやねえよ。』……ぐさーつ。高貴は深く傷ついた……つと

同時にこんな一個下の餓鬼になめられてたまるか。と言ひ怒りが溢れ出してきた。

『おい。てめえ。いい加減にしろよ。美咲さん嫌がつてんだろ。』

……俺は奴の胸座を捻り掘んだ。……怒りのせいか、恐怖のせいか俺は全身で震えていた。

『新たな友人……？？』

俺の人生初の喧嘩が今行われようとしていた。……美咲さんのためだ、悔いはねえ。

相手は不謹慎にも学校の廊下で美咲さんを口説こうとしたが失敗に終わり、それでも諦めずしつこく美咲さんに絡んでいた俺と同じ一年生だ。

学年は同じだが俺のほうが歳は一個上。……実際なら俺のほうが先輩。【……】で引いたら男が廢るッてえもんだ……花は桜、男は山岡、……男、山岡。美咲さんのためにいざ出陣】

でも……奴は俺の一個下とは思えないほど体格が良く、身長も175センチある俺よりも10センチくらい高く、体系も子豚が綺麗に引き締まつた様にがつちりした、何処からどうみてもレスラーだ。

【ええい……弱音を吐くな。俺が奴を止めなきや、美咲さんは……】

『おら、どうした？？？せっかく胸座掴んだだから投げ飛ばしてみるよ……』……つち。『ココラめ……俺に数分考える時間をくれ、いや、数秒で良い。

俺は奴の期待通り投げ飛ばすなんて野蛮な事はせず、（できるはずもなく）できる限りの鋭い目で奴の目を睨めつけていた。

『クオーラア……お前ら、朝からなにじとるんじゃつあ……またお前か……岡田あ……』

廊下じゅうにや、教室の中までも響き渡るほどの怒鳴り声に俺と腐れ外道の視線のぶつかり合いは一時中断され、声の主の方を見た。

『げ、……飯沼……』先に叫んだ主を発見したのは奴だった。……どうやら叫び主は生徒指導の飯沼らしい……

飯沼は白髪のオールバックで、見た目だけでもかなりの威圧感のある鬼教師だ。体罰なんて朝飯前、時には逆らった生徒とタイマンだつてしまつたりするらしい。……こりや、最悪だ。

飯沼は俺たちの方へと一步一歩、近づいてきた。飯沼が近づくに付れて聞こえるはずもない足音、ズシン！－ズシン！－という地響きが聞こえてくる気がした。

俺は岡田とやらの胸座から手を放し、飯沼が目の前に来る前に「気をつけ」の姿勢になつていた。……不思議な事に岡田も俺同様「気をつけ」の姿勢になつっていた。……さうに言つたら美咲さんまでもが「気をつけ」の姿勢になつていた。

飯沼は止まることを知らないのか、俺たちと顔がひつつきやうになるまで近づいてきた。……その距離約15センチといったところだろう。……気持ち悪いので辞めて貰いたい。

……が、こんな状況で、『ちよ、ちよっと先生。近いっすよ……おっさんには顔寄せられても気持ち悪いだけなんでもう少し離れていただけないでしょ？』……なんて言おうものなら骨すら残らないだろ？……男のカンがそう言つていた。

当然、岡田とやらも「気をつけ」の姿勢でぴくりとも動かなかつた。……ちよとした不良がヤクザに絡まれたみたいに……

『岡田！……お前、今度学校で騒いだらどうなるつて言つたか覚え

「どうしたの？」「……」飯沼の声はこの距離でも小さくなる事はない、俺と岡田の顔に唾が満遍なく飛んできたしだいだ。

当然だが汚いなどと言えるはずも無く、ひたすら顔に掛かる唾と息に耐えながら聞くしかなかつた。

『お騒がせしてすいません！！！決して揉めていたわけではありません！！！久しぶりに友人にあつたものでついついテンションがあがつてしまいまして。』…よくもまあ、いう口が回るもんだな。少々感心した。

『俺や美咲さんにとっては正直に打ち明けた方が良さそうだが、流石にこんな先生に叱られると思うと敵ながら同情が芽生えてきた。』『私もすいませんでした…』と美咲さんが飯沼に謝った事で岡田に

口裏を合わせてやることが確定した。

仕方なく俺も頭をさげ、数分怒鳴られる事で開放された。

一悶着あつたが、とりあえず美咲さんも無事なわけで、めでたしめでたしで教室に戻らうとした。

『おい。』……声の主は岡田だ。……なんなんだ、こいつはまだ懲りていないのか……今度飯沼に見つかつたら完全に現行犯になるのがわからんのかね……

『何か?』……と俺が足を止めると、美咲さんも立ち止まつた。

『さつきはすまんかつた！――飯沼に本当の事言つてればお前らは何事も無く開放されただろうに……まあお前らが俺に合わせてくれたおかげで俺の命は助かつたわけだ……本当にすまんかつた！――』……とつさに俺は美咲さんを見てしまつた。美咲さんも俺のほうを見て

目を丸くしていた。俺も美咲さんみたいに驚いた表情をしていたのだろう。

美咲さんの目は俺に岡田に返事をしてくれ、と訴えてくるように見え……『気にするな……昨日の敵は今日の友だ……』つと俺は親指を立てて言い放つた。……いやー。見事にすべつたけどね。

『こ、高貴君……』美咲さんのクリクリと丸かつた目は気持ちの悪い猿でも見るような細い眼に変わり、その反面、さつきまでギュッと矢印の様に閉じていた目は丸く開かれていた。

『昨日の敵は今日の友じゃなくて、さつきの敵は今の友だったな』ハハハハア……』……Whyy? 何故俺がこんな仕打ちを……

美咲さんは俺に預けていたカバンを奪い返す様に取り、一人で教室へと戻ってしまった。美咲さんもあんな顔するんだな……と知った時には既に遅し……美咲さんははるか遠くの自分の席に着いてしまつていた。

『な……なんかすまんねえ。お前らが喧嘩する事ないのに……』……今ならこのレストラン岡田すらも瞬殺できるのではないかと感じた。

『うるせーほつとけ、お前には関係ねえ……』言つておぐが俺とお前は友達でも何でもねえからな……わかつたらとつとつ失せん……。』……初めて朝早く学校に来たと思えば……本当にろくな事がない。

岡田は何を考えているのか、失せると言つているのに全く失せる気配がなく、窓にもたれかかる俺の横に居座り続けた。……座つては居なかつたが。

『あー。高貴君……およはう! もうこます! 今日は早いんですね

？？…どうかされたんですか？？…子豚だ。

『おお。子豚か。おはよ。今日は先生に聞きたい事があつたんで早くきたんよ。』

『へえ。そつなんですか…高貴君にも聞きたい事なんてあるんですね。』…子豚よ。この時代では天才児かもしけんが俺だつて一応人間だ疑問に感じ聞きたくなる事だつてあるさ。

『つむ。』

『ところで、お隣のでつかい人はお友達ですか！？』…子豚は岡田を見上げながら言った。

『おう！…！…』…岡田。

『違つ……』…俺。

同時に真逆の応えをした事に子豚は混乱しだした。

『え？？？どうゆうことなんですか！？』

『朝つぱらからこいつに絡まれて、悲惨な目にあつただけで、俺とこいつは友達でもなんでもない。』

『おう、高貴！…さつきは確かに世話になつたが、俺とダチになる事をそんなに嫌がらなくともいいじゃねえか！…』…お前に高貴と呼び捨てにされる覚えは無いがまとい。

『ふむふむ。君は高貴君と友達になる事を希望しているのですね。』…と子豚は楽しそうにクスクスと笑つて言った。

『あ…？？大体何だてめえは、ココは中学校でも、ブタ小屋でもねえぞ。とつととけえんな。』…子豚に笑われ少々キレ気味の岡田。

『し、失敬な。僕は中学生でも、ブタでもありません。名前は確かに子豚ですが、正真正銘、人間です。』

『おい、子豚、こんな奴に一々腹を立てるな。騒ぐと生徒指導の先生が来るだろ…』

『あ～そうだそだ、いけねえ。騒ぐのはまずいな。』…子豚を見下ろしていた岡田も冷静さをとりもどし、定位置（俺の横）にもどつた。

俺はあまり騒がぬように、子豚に今までの経緯を一寧に説明し、子豚も大体の状況把握はできた。

『へえ…それは悲惨ですね…』

『だろ？？』

『でもまあ、岡田君は高貴君の友達になりたいみたいですし友達にしてあげたらどうですか？…僕が聞いていて思つた事は岡田君が友達になる事と美咲さんに嫌われた事は関係ないと思います。』…子豚の癖にきつぱりと言い切つた。

『うぬ。豚の言つ通りだな。俺とお前が振られた事には何の関係もない。』…岡田もいつの間にか打ち解けだし、腕を組みながら頷いていた。

『いいじゃないですか…岡田君が友達になつても…高貴君、言つちや悪いですけど友達、僕と美咲さん以外居ないでしょ？…』…グサツ…！…酷い…酷すぎる…あんまりだ…

『な、んな事、ねえぞ。今日、あそこの山下さんと友達になつたしよお。』

『…あの人は木下さんですよ…』

はあ…もつ認めざるを得なかつた。確かに俺はこの学校に入つて付き合つて言ひ付き合いは何にもしていない。偶然受験が一緒になる子豚や美咲さんが居なかつたら… そう思つと少しづつとした。

『岡田…お前の名前は…』

『あ？？…お前が先に名乗れよ。』…無理だ。俺はこいつとは絶対に上手く行かない。そう思つ弱氣心を押ししつぶし、堪えた。

『俺は高貴。つてお前さつき呼んでただろうが。苗字は山岡だ。…お前は？…なんか口に出して名前を逆さに読むと流石にまだ違和感をかんじるな…』

『おう！…山岡か。俺は、慙愧^{ザンキ}・岡田だ。』…なんちゅー極悪そつな名前しとるんだ』…いつは…

『高貴君、良かつたですね。友達が一人増えましたね。…高貴君の友達は僕の友達でもあります。新輔・子豚と申します、以後お見知り置きを。』

まあ、最初は乗り気は無かつたが話してみると、子豚、美咲さんの一人より俺は岡田との方が話が合つらしく、久しづりに俺の時代の友人の事を思い出した。あいつら、何やつてんのかな…英明さん…考へても悲しくなるだけだな…と心の涙を拭いて子豚と岡田との会話に戻つた。

岡田とマジで友達になつたことを美咲さんが知つたら… そう思つと教室に入る足取りが重く感じた。

『新たな友人…？？』（後書き）

御閲覧本当にありがとうございます。

大変、身勝手な事なのですが土日は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

先週、岐阜県の飛騨へ温泉旅行に行つてきました。私も驚いたんですけど雪が尋常じゃないですね…

私の住んでいる所はまだ雪が降つておらず（日本の殆どがそうだと思うんですが…）ノーマルタイヤで向かつたわけです。

天候も悪くなく、快調に高速を飛ばしていると、普段は見かけぬ人が居ました。… そう。検問です。

私は見事にチエーン規制に引っかかり、人生最大の200キロユーターンをし家に帰りスタッフレスに変え再び飛騨に向かいました…

皆さんも年末出かけると思いますが、寒い所に行く際にはチエーン規制だけには十分注意してください。普通は引っかかりませんよね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5175f/>

CROSS...

2010年10月10日15時58分発行